

沢庵和尚の生家と曹洞宗松林寺

東 隆 眞

はじめに

一、沢庵和尚の略伝

二、松林寺の諸資料

A 玉室宗珀和尚の書簡

B 松林寺開扉仏縁起

C 岡与三右衛門由緒

D 松林寺開基岡家位牌背文

(a) 松林寺開基藏位牌背記

(b) 岡宝洞石光の記録

三、岡家の系譜と墓地

四、沢庵和尚と岡家

おわりに

註

はじめに

昭和四五年夏、私は、東京大学助教授鎌田茂雄博士の或る委嘱を受けて⁽¹⁾、富山県下新川郡朝日町泊に在る曹洞宗寺院、雲黄山松林寺を訪問した。この時、同寺の在田祐芳住職から、松林寺の開基は沢庵和尚の生家である岡姓であり、また松林寺境内の墓地には沢庵和尚の族兄をはじめとする岡一族の墓碑が現存し、ただいまその末孫によって、先祖累代の供養が怠りなく続けられていることを聞かされた。そうして、その後郷土史研究家野島二郎氏が、岡家の由緒書記録で、岡姓は沢庵和尚の血縁であることを調査したということを報ずる『北日本新聞』⁽²⁾の記事や、『沢庵和尚の実家について』と題する『日本歴史』⁽³⁾の論説などを紹介された。

然し、今更あらためて言うまでもなく、従来の通説に従えば、沢庵和尚は、天正元年、但馬国出石領主山名宗詮の家臣秋庭綱典の子として生れたとされている。即ち、沢庵和尚は、但馬国出石の出身なのであ

る。

ところが、いま沢庵和尚の生家は、但馬ではなく越中であるという。これは、これまで一度も耳にしたことのない全くの新説である。事実は果して何れであろうか。私は、当然起るべくして起る疑問を抱くこととなった。そして、それだけではなく、この疑問は、なおいくつかの新しい興味と関心へ展開してゆくこととなった。

沢庵和尚は、さきにも触れたように、ひろく但馬国出石の出身と伝えられているが、いまいかなる理由をもって、その生家が越中国泊に在るとなされるのか。いったい、泊には、沢庵和尚の生家に関するどのような文献史料が伝承されているのであろうか。また、その伝承が生れた背景事情はなにか。知られる通り、沢庵和尚は、わが国江戸期における禅宗の高僧であって、剣聖といわれる宮本武蔵や柳生但馬守の参禅師として、あるいは第三代將軍徳川家光に格別の信頼を得た傑材として、あるいはまた沢庵漬けのはじまりとともに、その名はひろく庶民の人口に膾炙されるところであるが、このような高僧を生むに及んだその出家の動機は、そもそも何であつたのか。その動機は、生家の環境事情となんらかのからみあいがありはすまいか。もし、ありとすれば、そこにはどのようなことが推測されるであらうか。また、松林寺は在田春さいでんしゅんりゅう 竜和尚を開山におおく曹洞宗寺院であるのに対し、沢庵和尚はもとより臨済宗に属するのであるが、その沢庵和尚の近親者は、なぜに曹洞宗寺院の開基となつたのだろうか。そしてまた、沢庵和尚の生家を名乗る岡姓は、どのような家系であるのだろうか。こうした沢庵和尚と松林寺との結び付

きをめぐって、江戸期の北陸地方における曹洞宗寺院伝播の実態を、どのように受けとめてゆけばよいのだろうか。

このような諸問題にとりかこまれた私は、沢庵和尚をめぐる岡一族や松林寺の調査に足をふみこむこととなり、その翌年、翌々年とつづいて松林寺を訪れ、また、この土地や東京在住の多くの関係者にも面接して、これらに関する新しい文献史料や珍しい伝承を蒐集し、一応の整理をつけたのであつた。ここに、その研究成果の一端を叙述して、大方の御参考に供するものである。

一、沢庵和尚の略伝

沢庵和尚たくあん（一五七三—一六四五・以下、和尚の尊称を省略する）は、愚堂（一五七七—一六六一）、無難（一六〇三—一六七六）、盤珪（一六二二—一六九三）、白隠（一六八九—一七六八）らとならんで、わが国近世における臨済禅宗の代表的高僧である。まず、はじめに、沢庵の行歴を素描しておこう。

沢庵伝に関する文献は、昭和三年（一九二八）二月三〇日、沢庵和尚全集刊行会が発行した『沢庵和尚全集』全六卷（細川侯爵家蔵版）がその根本史料とされているようである。たとえば、沢庵の開創になる東京の品川にある万松山東海寺の住職であつた故伊藤康安氏は、昭和一八年（一九四三）に『沢庵』⁵を著わしているが、この著書は、序文に「『万松祖録』に拠つて書いた」ことが明記してある。『万松祖録』は、もともと同寺の所蔵であるが、これが『沢庵和尚全集』の巻六に収録されて

いるのである。また、ついで昭和十九年（一九四四）、西義雄氏らの禅学会が編著した『沢庵禅師之研究』の「はしがき」をみると、「更に沢庵の深い研究を望まれる人は、本論集を緒口として沢庵和尚全集（細川侯爵家蔵版）に依られんことをお薦めする」とのべてある。これら二著は、ともに、沢庵和尚三百年忌の記念事業として、その同志が企画した出版であるという。さらに、昭和四二年（一九六七）『講座禅』第四巻に『沢庵』を執筆した永田豊州氏は、「沢庵和尚の事は『沢庵全集』六巻につくされている」と断言している。永田氏は、沢庵の故里、但馬国出石の名刹、宗鏡寺の住職である。以上のことから、沢庵和尚の全貌は『沢庵和尚全集』全六巻に収められているのみならず、従来の沢庵研究家も、また、多くの全集にその典拠を求めているとみてよいのである。

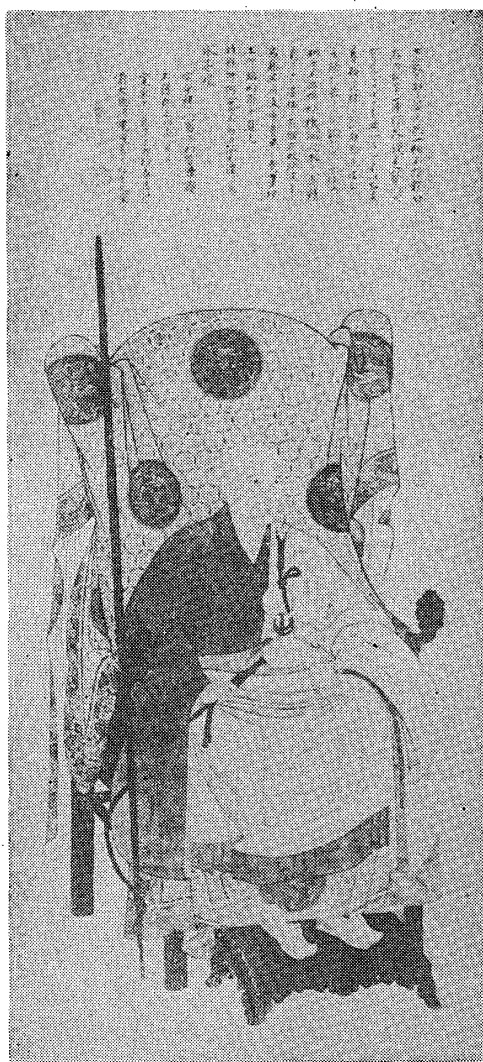
ところで、沢庵の伝記は、直接には、『沢庵和尚全集』巻六におさめられている『東海和尚紀年録』および『万松祖録』の両書に依るべきであろう。前書は、「慶安庚寅秋九月十一日誌焉」「受戒弟子武野氏沙彌宗朝謹編」の識語をもつ。後書は、「明治四十年十月謄写」した。もと弘化元年（一八四四）、沢庵の二百年忌を記念する「沼田藩工藤行広編輯」にかかわる。その行実を年代順に記録した伝記は、この両書のほかにもみるべきものがなく、また最も秀れていると考えられるからである。

しかし、ここでもっとも注意を要するのは、のちにも触れるところであるが、沢庵は、遺誡のなかで、「我無嗣法之弟子、老僧身後、若下一称我弟子者、於有之者、是法賊也、報千官可处大罪矣」⁸ある

いは、「莫筆作年譜行状」とのべていることである。自分には、後継ぎの弟子は無い。弟子は、つくらないのである。自分が死んだあと、わが弟子と名のる者は、仏法の賊である。官に報じて処すべき大罪である。また、自分の年譜・行状などは作ってはならない。これが、沢庵の遺言の一句であった。

この点、門弟の宗朝は、『東海和尚紀年録』を撰述するにあたって、「与背遺命以存師事跡於永久」といい、また工藤行広も、『万松祖録』の編輯に際して、「予もおのつから帰依するものから、此書編集の心おこりて諸書を涉獵する」といい、伝記述作の意趣は、沢庵の遺徳を顕彰するところに存することを、それぞれ弁明している。やむにやまれぬ沢庵への敬慕から、遺誡を犯して伝記をつくったわけである。

いま推量するに、沢庵は、多くの述作を残しているが、ふしぎなことに、みずからの出自など私的身辺について多く語るところがない。いわんや、その自叙伝を執筆するというようなことも、まったくしなかったであろう。禅僧には、こうした傾向がしばしば見られるが、なかでも沢庵には顕著なものがあつたようである。それは何政か、確かなことは何もわからない。したがって、門弟の宗朝はじめ、沢庵の周辺の一とびと、あるいは関係者のあいだでは、沢庵の行歴に関して、沢庵の行状を見聞し、その見聞に尊崇の念を添えながら、あるいは場合によっては、虚実とりまぜた憶測も加えて、ここにひとつの沢庵像を造型していったことであろう。いずれにせよ、沢庵の伝記は、ことごとく門弟ないし後人の作であつて、沢庵自身の手になるものではない。その限りにおいて



沢庵和尚自賛頂相(10)

沢庵の伝記には、史実の誤認や未知があるかも知れないのであり、沢庵賛仰の目的に走るのあまり、その内容が公正を欠いているかも知れないという危懼を感じないではおれないのである。

さて沢庵は、天正元年(一五七三)癸酉二月一日に生れた。幼名はなんと呼んだのか、記録するところがないが、沢庵の出生に関しては、本論の中心課題の一つであるから、その族縁について、ここでとくに詳しくとりあげておかねばならない。沢庵の家系、両親、兄弟などについて、『万松祖録』を中心にとりあげてみると、次のとおりである。

武州荏原郡品川邑万松山東海寺の開山沢菴和尚、諱は宗彭は、大徳寺の明堂古鏡禪師一凍紹滴の法嗣なり。父は、秋庭能登守平綱典、其先関東の人にして、三浦介義明か後裔なり。

天正十八年小田原陣の時、北条方武州忍の城に楯籠る軍勢の中に、

秋庭三太夫と云人あり。但馬国出石の城主山名右衛門り、綱典の一族か。中比、但馬国出石の城主山名右衛門督祐豊入道宗詮に仕て、出石に住す。山名氏の但馬を領せること久し。山名持豊入道宗全の五代右衛門督祐豊、入道して宗詮と云。其三男慶五郎氏政、相統して城主たり。元此城、出石郡小盗山にあり。其唱のよろしからざるを以て、同郡有子山に城を移し築く。是天正二年の事にて、今の出石城是なり。母は牧田氏の女なり。但馬国朝来郡に牧田村あり、いつの頃にか地頭に牧田又太郎光盛と云人あり。此後胤の女か。

天正元年癸酉

十二月朔日、和尚、

和尚とのみ書せのは、皆沢菴の事なり。末是に準へ。出石に生る。出石城は此時

いま小盗山にあり。一説に、同郡大塚村に生ともいふ。

里入伝て云、和尚の父一寸八分の青銅仏を持伝て、甚是を尊信す。或年、綱典、主命にて他国したりしか、其妻、夫の留守に、もしや仏像を失ん事もやと深く是を案し、肌を離さず、夜も襖のうちに置いて臥したりしか、幾程なく懐妊したり。夫帰て、妊身をあやしみ譴責す。妻証を立て、密夫の業ならざる事を明かにし、青銅仏を夜々襖のうちに置事を云。綱典、青銅仏の為に妻の懐妊せしと、猶信心弥増ぬ。程なく男子を生、是沢菴なり。此仏像、今に出石の如来寺に安置すると。こは、何人の云出せる妄言にや、浮屠氏多く斯る怪しの説を作て、愚民を迷はず事甚

し、不義破戒の仏の子に、道德の沢菴いかで生るべきや。妄説なる事疑へからず。又或人、予に問、沢菴は道德の聞へ高けれど、可碩上人か血の池の事、祐天の絹川累の如き事となきはいかにと云。予、さる怪しの奇特ある僧にはあらしと答へぬ。

性劍鋒金卦当咸九四。占者の云、易に、初六咸其拇二六二咸其腓九三咸其股雖然不言九四咸其心所感乃心也。この小児、道に志あらは、必心に得ところあらんとありしかは、是よりして出家せんと思ひ立ちぬ。(『万松祖録』)

(前略) 夫但州如来寺之草創者。武州品川東海淨刹開山師祖沢菴大和尚之阿爺前能州大守秋庭氏綱典雲峰以間居士三世先伊賀守入道岩松宗榮居士詣信州善光寺。逾月累日。借仏工師手彫刻如来尊容畢。供奉歸但州。於入佐山麓建立一字堂。奉安置如来。(後略)

(『万松祖録』)

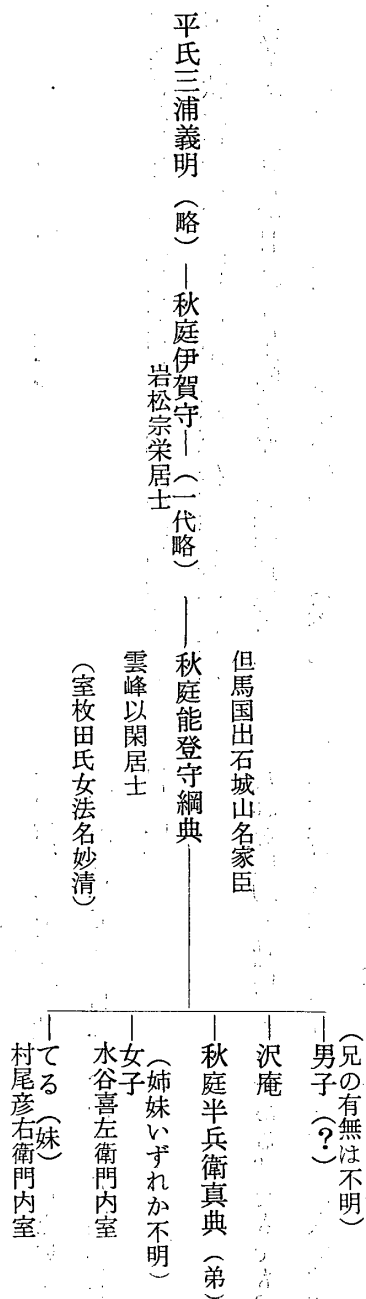
和尚に兄弟あり、内婦人あり、姉妹しりかたし、此婦人、小西行長の臣水谷喜右衛門某に嫁、男子あり、是和尚の甥なり。小西家没落の後浪す。和尚甥のつつき有を以、本藩に仕へしめ、代々水谷氏を称す、水谷実平といふ者故有て亡命し、家断絶す。実平亡命の時、家に伝ふる処の三品を残して去る。其一是、泣達摩と称する達摩の一軸、其筆者をしらす、一説に和尚の筆也とも云、昔他へ贈りしに、水谷家に帰らんと

云て泣しと也、依名つくとかききぬ。外両品は、朝鮮征伐の時、行長に従ひ渡海し捕歸りしといふ堆朱香盒に皿なり。後寛政六年、和尚か百五十年忌の時、東海寺一山、水谷家再興の事を議して、玄性院をして本藩へ願書を出す、是に依て、今泉貫左衛門次誠二男、幼年ながら名跡を命せられ、水谷家再興す、是今の水谷左助公滂なり。前に云朝鮮より持来る両品は、今に家に伝ふ。達摩の画幅は、実平亡命の後、親類より東海寺へ納、今玄性院に是を伝ふ。水谷家にては、東海寺へ納と其故をし、秘物として、其箱を釘を以固め、更に見る事をせず。何政にや。弟を秋庭半兵衛真典といふ。父綱典の譲を受て家を続、無頼の人にて有しにや、和尚より異見なからの返書あり。(『万松祖録』)

これを要約すれば、こうである。そもそも、沢庵は、平氏の流れを汲み、俗姓を秋庭という。もと関東の人で、三浦介義明の後裔であるという。三世まえの秋庭伊賀守は入道して岩松宗榮居士と言った。沢庵の父は、前能州大守秋庭綱典、雲峰以間居士とよぶ。能登の七尾城から、秋庭家と村尾家が但馬国へやってきたというから、おそらくそのゆえをもつて、前能州大守としたのであろう。山名家の重臣であった。『東海和尚紀年録』は、「秋庭能登守平綱典」とし、「雲峰以間居士」としているが、この方を探るのがよからう。母は枚田氏、その法名は妙清。『万松祖録』は、「母は牧田氏の女なり」としているが、これも牧田氏ではなく枚田(ヒラタとよむ)氏が正しいらしい。⁽¹²⁾枚田氏は、現在の兵庫

県朝来郡和田山町枚田の枚田氏で名門の筋であるという。⁽¹³⁾ 沢庵は、この二人を父母として出石に生誕したというのであるけれども、ほかに山名の大主の子であるとの口碑もあるようであり、また一説に生誕地を但馬国出石郡大塚村とするというが、同郡には、大塚村という地名はない⁽¹⁴⁾のであって、『万松祖録』の記事は、この点においても、誤りがあるようである。さて、沢庵には兄弟姉妹いわゆる男のきょうだい女のきょうだいがいたらしい。兄は果していたのかどうかわからない。弟には秋庭半

兵衛真典というのがいた。無頼のひとつで、沢庵の心痛の種であったようだ。また、女のきょうだいがあって、水谷喜右衛門に嫁して一男をもうけたという。また、妹に、てる女があり、村尾彦右衛門に嫁したという。村尾家と秋庭家とは、もともと親類つづきであった。⁽¹⁵⁾ 以上これを図に示すと、沢庵を含めて、およそ七員の名を、一応は辿り当てることのできるのである。



天正七年（一五七九）、七歳のとき、沢庵は、秋庭綱典に連れられて、出石の円覚山宗鏡寺に到り、正受院周嶽西堂に謁し、十歳を俟って周嶽の弟子となることを予定したが、天正八年、羽柴秀吉が織田信長のために山名氏を攻め、山名氏は他郷に逃げ、境内は混乱したため、遂にこの事は果されなかったという。けれども、十歳にして、出石の浄土宗唱念寺の住持、堪蓮社衆譽の門に入って出家、僧名を春翁となづけられた。もつとも、出石では、沢庵は、秋庭伊賀守・岩松宗栄居士の創めた

浄土宗如来寺で出家したという天祐紹果（大徳寺第百六十九世）の記録があるのである。

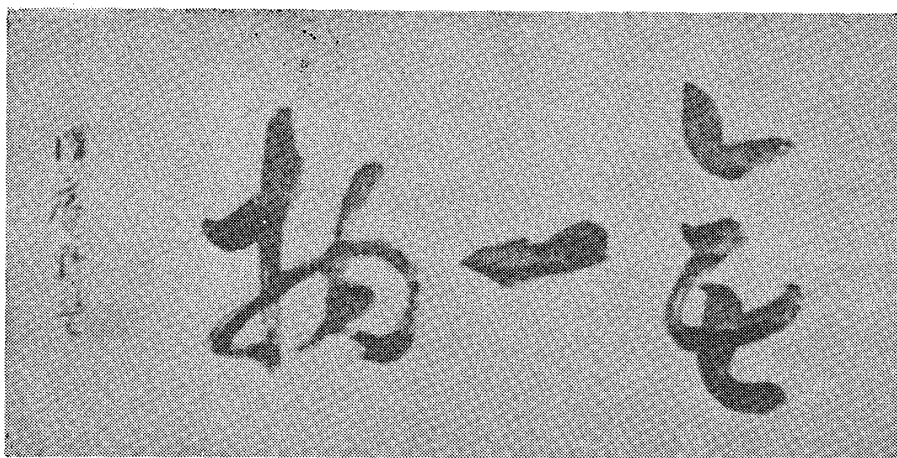
ところで、ここでいささか不審に思われることは、沢庵の出家についてである。沢庵の出家については、「占者云（略）此小人志于道則必有得于心也。於是。父母以為使此兒出家焉」「師七歳。父携師到宗鏡禪寺。謁正受院周嶽西堂。謂曰。此兒至十歳。則当投老師出家。嶽応諾（略）。州主山名宗詮聞之而喜。」「師十歳。入唱念寺而

為蓮社之徒（略）就「驅鳥之列」としるされてあるだけで、このほかに何ら知る手がかりはない。もし、いま右の『東海和尚紀年録』による限り、はじめ出家にふさわしいとの占者の卦があり、父の秋庭綱典に七歳の沢庵を出家させたい希望があつて、その意向を周嶽に伝え、周嶽もこれを諒としていたのであり、次に、衆譽が両親に十歳の沢庵を自分の弟子に所望したため、沢庵は浄土宗唱念寺の驅鳥となつたのである。従つて、沢庵の出家については、父親ないし両親、周嶽ないし衆譽らの側の意向が記録されてあるだけで、少年沢庵の出家の意思等については、一言半句も明記されていない。果して、沢庵自身に積極的な出家の意欲があつたのであろうか。どうしても坊さんになりたいという気持ちがあつたのであろうか。疑えば疑えぬことはない。さらに言えば、沢庵は父が三三歳のとき、母が二六歳のとき生を享けたわけであるが、現代と比較して早婚の当時としては、かなりおそい出生であつて、いわば待望の世継ぎ誕生といわねばならぬところであらうが、にもかかわらず、沢庵は出家した。いったい、どんな事情から、父親は沢庵を自家の外に出して、僧侶への道を歩ませるべく予定していたものであろうか。なお加えて言えば、沢庵には半兵衛真典という実弟がいた筈である。この実弟はいささか無頼の気味のあるひとであつた。この実弟が出家するのならばともかく、将来は家長の立場と責任をもつであらうところの兄の沢庵が、なぜに出家しなければならなかつたのであろうか。ともかく、沢庵の出生及び出家に関しては、肝心な点がいまひとつはつきりせず、あいまいなままになっているのである。

ついで、天正一四年（一五八六）、沢庵一四歳、禅道を学びたい志が嵩じ、やがて宗鏡寺の塔中である勝福寺に入り、希先に師事して、名を秀喜と改めた。天正一九年、希先が遷化した。つぎに、文祿元年（一五九二）、二〇歳、のちに大徳寺第一二八世となつた薫甫宗仲が前野但馬守長寿の招請に応じて、宗鏡寺に寓居していたので、その教えを受けた。その在世中、文祿三年（一五九四）、二三歳、薫甫に随伴して入洛、北派の大徳寺三玄院に於て、春屋宗園（一五二九—一六一一）にまみえた。春屋宗園は、城州の人で、俗姓を蘭部氏といい、笑嶺宗訢の法嗣である。号を一黙子となえ、また、正親町天皇から朗源天真禪師、後陽成天皇から円鑑国師の号を下賜された。大徳寺第一一世となり、三玄院を開く。黒田長政、石田三成、浅野幸長、森蘭丸などの帰依をうけ、その門下には、玉室宗珀、江月宗玩がおり、津田宗久、小堀遠州らが在俗の弟子である。その周辺は、大名、富豪、茶人などが圍繞しており、すこぶる華麗な行動半径をもつた人である。沢庵は、この春屋に参学して、諱を秀喜から宗彭に改めた。薫甫や春屋に学ぶ一方、転じて泉州堺の旅籠町にある東福寺末、大安寺に赴き、真如寺の文西洞仁に就いた。広く文墨を修め、和歌百首を詠じて、細川幽斎の批判を請うなど、禅修行のかたわら、五山文学や詩歌に指を染めた。文西は、建仁寺系の学僧として、長袖流の学問ではなく、実生活に活用できる学問を教えていたという。

文西に就いていた当時、沢庵の日常は、あいかわらず清貧に徹したものであつた。海会寺の法事に招かれたが、汚れた白衣が一枚しかない。

前夜に洗濯したが、朝になっても乾かない。そこへ同僚が迎えに来たが



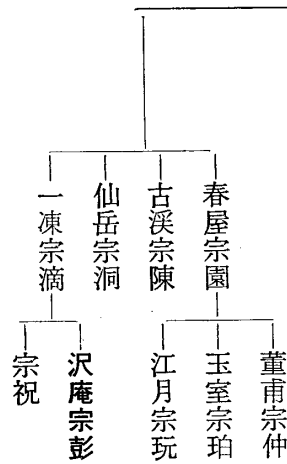
沢庵和尚墨蹟 (16)

裸体のままであることをはばかって、面を見せず、乾くのをまって後から参加したという。こういう挿話が伝わっているくらい、このころの沢庵は、厳しく貧しい猛烈な修行のなかに没頭していたのである。

慶長八年（一六〇三）、三一歳、堺の陽春菴や南宗寺に、笑嶺の禅風を挙揚していた一凍紹滴をたずね、学ぶこと日夜怠りなかった。一凍は、明堂古鏡禅師と勅号を賜わり、春屋宗園とともに笑嶺の法嗣。みだりに人を近けず、枯淡にして峻厳、すこぶる古風を保っている人であった。若いころから、欲念と安臥を忘れ、梁から喉もとに縄をかけて、睡眠を払いながら苦修練行したという。沢庵は、この一凍にこそを魅かれ、その巾瓶に執侍すること僅かに一年、三二歳、慶長九年（一六〇四）八月四日、ついに契悟するところあり、印可証明の偈をうけ、沢庵の号を授かった。なお、一凍には宗祝という弟子がいたが、短命におわり、法嗣は沢庵ひとりとなった。余談にわたるが、一凍が沢庵に与えた沢庵道号頌が、『沢庵和尚全集』巻六の口絵写真に出ている。これを見ると、一凍の直筆では、「澤菴」としるしてある。しかし、管見によれば、沢庵自身は、自賛頂相や絶筆などをはじめ、ほとんど悉くは「澤庵」と署名しており、「澤菴」とは書いていない。まれには「澤菴」も見るが、⁽¹⁸⁾「澤庵」が圧倒的に多いのである。然し、沢庵以外のひとは、「沢菴」とも「沢庵」ともしるしているのが現状である。菴は庵の古字にすぎないから、⁽¹⁹⁾どちらでもよいが、私は、本論文では、沢庵の自署に従って、庵の字に統一している。

さて、ここで、沢庵の法脈を略記しておく、次の通りである。

釈迦牟尼仏—摩訶迦葉（中略）初祖達磨大師（中略）六祖慧能大師—
 南嶽懷讓—馬祖道一—百丈懷海—黃檗希運—臨濟義玄—興化存獎—宝庇
 慧顒—風穴延沼—首山省念—汾陽善昭—石霜楚円—楊岐方会—白雲守端
 —五祖法演—圓悟克勤—虎丘紹隆—応庵曇華—密庵咸傑—松源崇岳—運
 庵普巖—虚堂智愚—南浦紹明—宗峰妙超—徹翁義亨—言外宗忠—華叟宗
 曇—養叟宗願—春浦宗熙—実伝宗真—古嶽宗亘—大林宗套—笑嶺宗訢—



慶長一二年（一六〇六）、一凍が入寂、父の秋庭綱典が病死、その翌年、母が死んだので、陽春庵からあわてて但馬国出石へ帰った。この慶長一二年には、春屋宗園の法嗣、玉室宗珀が大徳寺第一四七世に坐し、慶長一四年三月八日、沢庵三七歳のとき、大徳寺一派の長老、玉甫紹琮の推挙により、後陽成帝の勅を奉じて、大徳寺第一五三世として入寺し、そのあとをうけて慶長一五年には、おなじく春屋の法嗣、江月宗玩が大徳寺第一五六世となった。三人とも春屋の鉗鎚をうけ、この三人は大徳妙心法度事件の立役者ともいうべき重要な人物であり、まさに同盟、同志の兄弟というべく、なかんづく玉室宗珀の書簡が、松林寺に現

蔵して、この書簡が沢庵と松林寺との関係を考証するにあたつて、不可欠の役割を果している関係上、ここに『南宗寺歴世略伝』⁽²⁰⁾の一節をかか

げておく。

十一世 玉室宗珀和尚
 洛陽人。自号嘆眠子。嗣法春屋。慶長十二年二月十九日出世。

後陽成天皇勅持賜直指心源禪師。創大源菴高林院。加賀国主為先
 妣新建大徳寺裡芳春院。請師主。寛永六年七月下武州。同月二十
 七日配流奥州赤館。寛永九年七月十七日赦免。寛永十八年五月十四
 日寂。寿七十。

十二世 沢庵宗彭和尚

十三世 江月宗玩和尚

泉境人。自号欠伸子。表徳号情袋子。又号赫々子。嗣法春屋。天
 正二年八月十八日生。慶長十五年十一月十五日出世。同十七年十月六
 日。

後水尾天皇敕特賜大梁興宗禪師。後創孤蓬菴寸は松菴。寛永二十
 年十月一日寂。寿七十。

ちなみに添えると、玉室は、加賀藩祖前田利家の正妻、東御方・まつ
 建立した芳春院の開山第一祖となっている。まづは、利家と従兄妹であ
 り、利家の薨後、剃髪して芳春院と号し、春屋宗園に師事していた。芳
 春院は春屋が与えた号である。慶長一二年（一六〇七）、春屋に相談し

て大徳寺山内に芳春院の建立を計画し、慶長一四年（一六〇九）五月に完成、春屋は弟子の玉室に住持を命じたのである。⁽²¹⁾また、芳春院は、利家の菩提をとむらうために、慶長一五年（一六一〇）、能登の総持寺を再興し、翌一六年に総持寺山内に、同名の芳春院を建てて、⁽²²⁾利家と自分の位牌を安置した。利家の戒名は高德院殿桃雲浄見大居士、まつのは芳春院殿花巖宗富大禅定尼という。

さて、沢庵は、奉敕入寺という臨済宗としては最上の榮譽である大徳寺住持の法席も、わずか三日を限って、早くもこれを投擲し、「由来、吾は是、水運の身」の起句ではじまり、「白鷗、終に紅塵に走らず」（原漢文）の結句におわる退山の一偈を唱え、さっさと南宗寺に帰ってしまった。さらびやかな世間的頤樂の如きは、沢庵のもっとも忌み嫌うところである。さらにまた、三九歳、豊臣秀頼は沢庵を大阪城に招いたが、これを固辞し、豊前国主の細川越中守忠興が、先考のために一寺を建立して再三にわたり沢庵を請したが、ついにこれも肯えんぜず、四〇歳の五月、紀州の浅野紀伊守幸長が沢庵に面会を申し込んだが、これもまた避けて会わなかったというようなことがある。これらも、沢庵の真面目を示す証左であろう。

然し、その反面、三九歳のとき、近衛前関白信尹の参問をうけたり、四〇歳には、『詠歌大概音義』一卷を撰して奉呈したり、四一歳の春、烏丸大納言光広に招かれて入洛し、四九歳のときは、光広に和歌百首の添削を乞い、五〇歳、出石に、光広の、五二歳、弾定尹高松好仁親王の、それぞれの訪問をうけたりしたこともあった。なかでも、光広との

交わりは、深いものがあつたらしい。また、細川越中守光尚は、その先考忠利のために、熊本城外に護国山妙解寺を草創し、沢庵を開山に招いたが、当時、東海寺を董していた沢庵は江戸を出るわけにいかず、沢庵の像を安じて第一祖としたという。それは正保元年（一六四四）遷化の前年であつた。細川家との交誼も、なみなみならぬものがあつたようである。

慶長一六年（一六一一）八月、三九歳で大遷院に移住し、四一歳、南宗寺と大僊院を統し、慶長一八年（一六一三）四一歳、かねて帰依をうけていた泉州岸和田の城主、小出播磨守吉政の卒去に遭って、その仏事を営み、その布施物で南宗寺の鐘楼を建て、また大灯国師年譜を編輯して、雲門菴に収めた。大阪冬の陣、夏の陣の戦火によって、大阪城が落ち、南宗寺は回禄に帰したが、元和二年（一六一六）出石城主小出吉英の寄進によって出石の宗鏡寺を再興し、元和三年（一六一七）には、小出、山名、北見の援助を求めて、南宗寺を再興した。慶長一九年（一六一四）五月八日、沢庵は、洛を出て、如玄、玄齊のふたりと江州に遊び八月には大僊院の書院をつくったり、拾雲軒を復興した。また、このころ、洛北の八瀬大原で架橋を施し、大徳寺の養徳院に住した。元和元年（一六一五）、朝鮮人の李文長をたずねたり、元和二年（一六一六）には李文長、慎昌仙、裴元臣、李碩之などと、連日、数十篇の唱和をつくっている。また、岸和田の天台宗薬王山日光寺、天下村の浄土宗極楽寺、漢口の芳林庵、和州泊瀬寺、城州薪村の酬恩庵、妙勝寺中の小庵、洛の玉井庵などに転々として寓居、世塵を避けて、山居を愛し、禅寂を楽しむ

んだのであった。元和三年（一六一七）ごろ、四五歳、大灯国師の墨蹟を偽造した大徳寺の前住である松丘をはじめその門弟数員を擯出して、寺法を肅正した。元和六年（一六二〇）、四八歳、出石の入佐山麓に「投淵軒」を結び、「一麻衣と一小鍋のみにして米粟を自ら炊く」朝夕をおくり、翌年、この軒で『理氣差別論』を著わした。「投淵軒」は、屈原の故事から名を得たという。

然し、世上に沢庵の名を高からしめた事件は、なんといつても元和元年（一六一五）家康が發布した諸法度のうちの、大徳寺法度に対する抗弁書を幕府に提出したことであろう。大徳寺法度は、五箇条から成るが、その第二条に、その住職資格は、三〇年の参禅修行と一七〇〇則の話頭を了畢し、諸家の門を遍歴して、悉く請益を遂げ、真諦俗諦を成就した者に限ると規定した。これは五山十刹の法度にも、永平寺、総持寺の法度にもなく、ひとり大徳寺と妙心寺の法度にもみ見えているのである。この大徳寺法度を立案し起草したのは、徳川幕府の権力を寺院のうえに拡大し、奉教入寺を不満とする立場の人物でなければならぬ。それはすなわち、南光坊天海とならんで家康の黒幕といわれた五山の第一、南禅寺の金地院崇伝であった。

然し、大徳寺は、この法度にかかわりなく、従来どおり、敕許の綸旨によって奉教入寺を行なっていた。寛永四年（一六二七）五五歳、但馬から入洛した沢庵は、玉室の法嗣、正隠を大徳寺に出世せしめ、南宗寺に帰った。けれども、幕府は、妙心寺に対しても同様、法度の違反者を処罪し、綸旨を奪い、紫衣をとりあげた。このとき沢庵は、大和三輪の

草庵に閑居していたが、直ちに大徳寺に上り、大衆と討議し、一山の代表に推され、みずから大徳寺法度に対する抗弁書をしたため、公儀に提出した。

沢庵の主張は、要するに、三〇年の参禅修行、一七〇〇則の公案透過を大徳寺の住職資格とするのは、あまりにも形式に拘泥し、事実にくく、世人を欺瞞する無意味な規則である。三〇年の修行というと、かりに一五、六歳で出家したものが、三〇年の修行を要し、さらに出世入寺に五年ほどかかるとすれば、自分の弟子も育てられない。これは実際問題として不可能であり、栄西、大応、法灯、夢窓、大明など古人にもそのような実例はないことである。大徳寺では修行の年限は二〇年としてある。修行は三、四年かかることも、やり方では一年で仕上ることもできるのである。

また、一七〇〇則は、『景德伝灯録』にのせてある祖師の人数であって、古則の数ではない。一七〇〇人のうち言句をしるしているのは九六三人であり、それらの言句を集めても一一〇〇則ぐらいしかない。然しもともと公案は数かぎりなく無限に存するわけのものであって、一七〇〇則に限るのではない。一七〇〇則をも一句で透過するということなどてはならない。一七〇〇則の公案と称するものは中国にも日本にもなく、かりにあったとしても、『景德伝灯録』の順序にしたがって修行するという伝統は聞いたこともなく、古人においても、そのような前例はなかったのである。

大徳寺開山大灯国師は大応に随侍すること一五年、一八〇則の公案に

参じ、二世の徹翁は大灯の膝下で八八則を透つて法嗣となった。禪宗は大悟が先決であつて、公案の数の多少ではない。また、元和から今日まで、大徳寺に人寺した者は、いずれも修行を成就しており、先規の寺法に背いてはいないのであるから、いまさら新しい規定を示されても、別に仕様もないことである。

おおよそ、このような趣旨であつた。この抗弁書には、芳春院の玉室宗珀、南宗寺の沢庵宗彭、竜光院の江月宗玩の三人が連署している。幕府は、三名を江戸に召喚して、その所見を聞いたが、沢庵、玉室とも一身をかえりみず、自己の信条を堂々と吐露して一步も退かなかつた。当然のことながら、この抗弁は、「権現様の法度に対し、異議を申立て候ことは、公儀を忤らぬ不屈の儀」となり、沢庵は、五七歳、寛永六年（一六二九）七月二五日づけをもつて、出羽上の山に遠流の刑をもつて処せられることとなった。玉室は、奥州の赤楯に流罪ときまつた。この処罪にあたつては、重刑を強調する崇伝と、軽罪を主張する天海の意見とにわかれるが、結局、流罪に決つたのである。江月は、遺憾の意を表したため、罪をまぬがれ帰洛を許されたが、その変節と軽卒さは、一般の冷評をかつたという。そして、この事件は、大徳寺対幕府に加えて、幕府対朝廷の政治的対立を惹起し、綸旨を無視して法度を重んじたかたちになつたため、ときの後水尾天皇は、これを憤慨し、三十四歳にして俄かに興子内親王に譲位し、仏道修行に沈潜してゆくこととなつた。かくて、沢庵は山の上の配処に着き、城主土岐山城守頼行の屋敷にお預けの身となり、山城守の好意によつて城外の松山に、「春雨庵」を建てて

もらい、ここに四年の歳月を送迎する。

上の山の配処における遠流の生活は、一口に言つてしまえば流罪生活にちがいはないが、沢庵にとっては、必らずしも、そうではなかつた。沢庵は、心境を書信にのこしているが、それを読むと、まことにすがすがしい一陣の清風をおぼえる。

すなわち、大徳寺一門のためはもちろんのこと仏法の真意からみて、みずから信ずる正義を隠せず喝破したまでのことであつて、心は塵ほども汚れていないから、身の苦しみなど何ともおもわれない。心がむさくらしいと思われながら、身の安きを願ふことは、自分の悦びとするところではない。そもそも、出家は三界を家とするのであるから、どこにいても同じわが家であつて、悲しいことなどはさらさらない。法のため、なくなつた師匠のために、みずから罪を得たこの身に、なんの嘆きがあるというのか。この上の山は温泉があつて、月に二、三度も入る。山城守も、なにくれとなくこまやかなころくばりをしてくれて、衣食住にはなんら事欠かない。お金や慰問品などは送ってくれても困る。全く不要である。

沢庵はこのように伝えている。もつて悠々閑々たる悟達の生活ぶりうかがうことができよう。この地で、沢庵は、山城守に槍術の極意をさづけて、『自得記』を撰し、また一旨流の槍術を授けた。また、土岐邸の造園を設計して、『庭の記』を著わし、また、『上中下三字説』の政治論を与えた。また、松島を遊覧し、一〇〇〇首の和歌や詩を詠み、また各地に多くの書簡をおくつて、そのたくまざる平常の心情をかきのこ

している。

人は、正しいことをして、誤解され、圧迫され、逆境におかれ、生命の危険におびやかされて、はじめてその真価が露わになる。いや、そういうときこそ、その人の人たるゆえんがはっきりとしてくるものである。古田紹欽博士は、「沢庵という人がどういう人であったかについては、今更紹介するまでもないが、とにかくばぬけた器量の人であり、学徳、人徳兼備の人で、江戸初期の禅界に、この人こそあり、と世に知られた人である。その生涯にのこした功績も勿論尋常ではなく、数え立てればきりのないことになる。物事にいい加減な妥協をせず、正邪を曲げることのなかった硬骨の人であり、世俗の権威に動ぜず屈せず、一身の利益、榮譽などもとり眼中になく、大徳寺の住持に迎えられても自からは野僧をもって任じ、紫衣の僧などといささかも思いしらなかった。学問、修行にかけても実行者であり、禅僧として秀でたことはいままでもないが、当時の知識人、文化人としても第一人者であり、江戸期の桑門文学者としてまず指を屈さなくてはならない。そののこした語録、詩文類は老大なものになるが、漢文学としても国文学としても見るべきものが多く、また、風雅の道にも深い嗜みを持ち、その書きのこした書・画のすぐれたものも少なくなく、歌人としても茶人としても幅広く知られた。沢庵は一介の野僧であつたが、その遺したものを見渡すと、人間一生の間になし得る仕事⁽²³⁾が、人によってこんなにも巨大なものになるのかと、一驚するばかりである」と評している。けだし、名言であろう。

寛永九年（一六三二）、六〇歳、將軍秀忠が薨じ、沢庵は玉室とともに

に赦免されて、七月、江戸に還り、翌年からは駒籠の堀丹後守の別荘で三年間をすごすこととなった。この間に諸方に遊び、『鎌倉遊覧記』、『木曾紀行』をものしている。

寛永一一年（一六三四）六月、玉室とともに公命によって入洛すると三代將軍家光が二条城に滞在していた。柳生但馬守宗矩は沢庵にすすめて將軍に謁見させた。再三辞退して、やむをえずその意に従った。柳生但馬守宗矩は、沢庵について参禅し、もって劍禅一如の極意に達し、かの有名な『不動智神明録』（『神明録石火機不動智』と表題する一書を授けられた。『不動智神明録』の肝要は、「心の置所」である。人間万事心のおきどころによって決まる。心をどこに置くか。一所に心を置けば「余の方の用は皆欠けるなり」。心を一方に置けば、九方は欠けるなり。そこで、「心をば何処にも置かずして、敵の働きによりて、当座当座、心をその所にて用心すべし」。『思案をも分別をも残さず、心をば総身に捨て置き、所所止めずして、その所所に在りて用をば外さず叶ふべし』。「心を一方に置かざれば十分にあるぞ」。すなわち、「分別も思案も何もなき時の心、総身にのびひろがりて、全体に行き渡る心を無心と申すなり」。かくて無心である。無心の劍、無心の禅こそ、必勝の劍であり、絶待の禅である。宗矩は、沢庵にほとんど心服するところがあったとみえる。

なお添えておきたいのは、宮本武蔵と沢庵との関係である。美作国に生れ、沢庵よりほば一〇歳の年少とはいえ、同時代に生を享けた武蔵が、但馬の沢庵に禅を学んで、劍と書、画の道に独特の境地を開いたこ

とは、吉川英治の作品『宮本武蔵』によって、はじめて万人に喧伝されることとなった。いまや、沢庵といえば、生涯五十余回の試合に一度の敗北も知らなかったといわれるこの武蔵を想起するほどである。然し、沢庵の伝記には、実は武蔵は一度も登場してこない。それは吉川英治氏の文学的想像が創作した新しい伝説であって、史伝のうえで、沢庵と武蔵との直接的交渉を跡づけるのはやや困難なようである。もっとも、最近、春木一夫氏は、出石の宗鏡寺に、沢庵と武蔵との合作になる竹の図が秘蔵されていることを伝えている⁽²⁴⁾。

さてまた、沢庵は後水尾天皇の御所で参禅の下問に答え、泉州から但馬出石に帰った。寛永十二年（一六三五）、台命により出石から江戸へ上り、柳生但馬守の麻布の別荘に寓居し、この庵を検束菴となづけた。翌年、江戸城に登り、家光に謁す。それから大徳寺へゆき、出石に帰える。また翌年、出石から入洛、四月、江戸へ行った。

寛永一五年（一六三八）、六六歳、家光は沢庵のために、品川に一寺を建立寄進したい旨を伝える。沢庵は但馬へ帰る途中、南宗寺に一凍紹滴の三三回忌、和州柳生に但馬守宗矩が建てる芳徳寺の開堂式に臨み、十月、後水尾天皇の仙洞御所に召されて圭峯宗密の『原人論』を提唱した。天皇は、沢庵に国師号を下賜しようとしたが、これを固辞し、かえって大徳寺第一世徹翁義亨に下されることを上奏したので、これを見とめて天応大現国師と追諡した。

寛永一六年（一六三九）、六七歳、江戸へ帰る。このとし品川の万松山東海寺が落成し、入寺開堂の儀式を挙げた。家光は、沢庵を江戸城に招

く。あるいは、沢庵を東海寺に尋ねる。仏法を聞き、禅を問うのである。ふたりだけで四時間くらいぶつとおして面談する。時には、能や舞踊の見物、鷹狩り、沢庵だけを招いての茶会などを催おして、沢庵に破格の厚遇を与えた。沢庵の東海寺在住七年間、家光が台駕すること七五たびという。沢庵は、その好意を深く感謝しながらも、「一日も心静かな日」がなく、「つなぎ猿のように」「迷惑」していると述懐した。家光の篤い帰依を得て、家光の権力に便乗したり迎合するなどという野心や欲望は、全くもちあわせていなかったのである。小堀遠州をはじめとする多くの武人たちの参禅に応じて、けっして彼等に狎れておぼれるということとはなかったのである。

かつて大徳寺の猊座に昇りながら、わずか三日にしてみずから退院した沢庵。天下の権位権力を完全に掌握する將軍家光に近づきをえながら、なにものも求めることをしなかった沢庵。沢庵は、当時の仏教界や禅門の腐敗墮落した現状には、まったく絶望していた。朝から晩まで碁や将棋に興じていたり、世間の榮耀にうつつをぬかしている俗僧どもをみるにつけ、もはや仏法を行じ、それを弟子に嗣がせる意志など、まったくなくなってしまうていた。「末世の法三十年前に見限り候間、相続の事も不思、寺の事、次て何と可成と云ふ事不存」、「仏法を行ひ申す可しと存ずる心は毛頭胸より出不申候。大徳寺派の作法を立て、此寺を持ち可申と申す心は一円無御座候」、「我は我他にて候」とすこぶる冷淡なことをのべて、宗団に対して、なんらの期待ももちあわせていないことを強調している。こうした沢庵の一種投げ遣りな態度は、もちろんさ

さまざまな批判の存するところであろう。然し、この潔癖さ、この激しさ、この純粹さ、この厳しさ、この美しさこそ、沢庵の本領でなくて何であろうか。私は、沢庵の沢庵たるゆえんを、ここに見出すのである。

寛永一八年（一六四一）、六九歳、大徳寺法度事件は解決し、このとし五月、玉室が滅し、同二〇年（一六四三）には江月が寂した。ふたりの遷化は、それがやがて沢庵の足もとにも近づいていることを、なにやら象徴しているかのようであった。けれど、法度事件が解決すれば、沢庵としてはいつ死んでも悔いはなかったのである。

正保二年（一六四五）、画工に命じて一円相をかせ、みずからそのなかに一点を加え、賛語を添えて、これを寿容となし、東海寺、南宗寺にそれぞれ一軸を残した。余命いくばくもないことを察知したのである。一二月一日、病いの悪化した沢庵に、枕辺の侍僧が遺偈を請うたが、沢庵は、これに手をふって拒絶したという。遷化に臨んで遺偈をしたためるのは、禅門の常習であるが、沢庵はこれに応じなかった。門人たちの重ねての願いに、夢、の一字を書き、筆をなげうって、ついに化を他土にうつした。世寿七三歳。

その遺偈が、すこぶるかわっている。いや、かわっているのではない。みかたによつては、これがあたりまえであるのかもしれない。あたりまえといえばあたりまえであるが、誰でも自分のこととなると、このあたりまえのことがあたりまえにならない。こうである。

全身を後の山に瘞て只土を掩て去れ、経を読むことなかれ、斎を設ることなかれ、道俗の弔賻を受ことなかれ、衆僧、衣を着、飯を喫し平日の

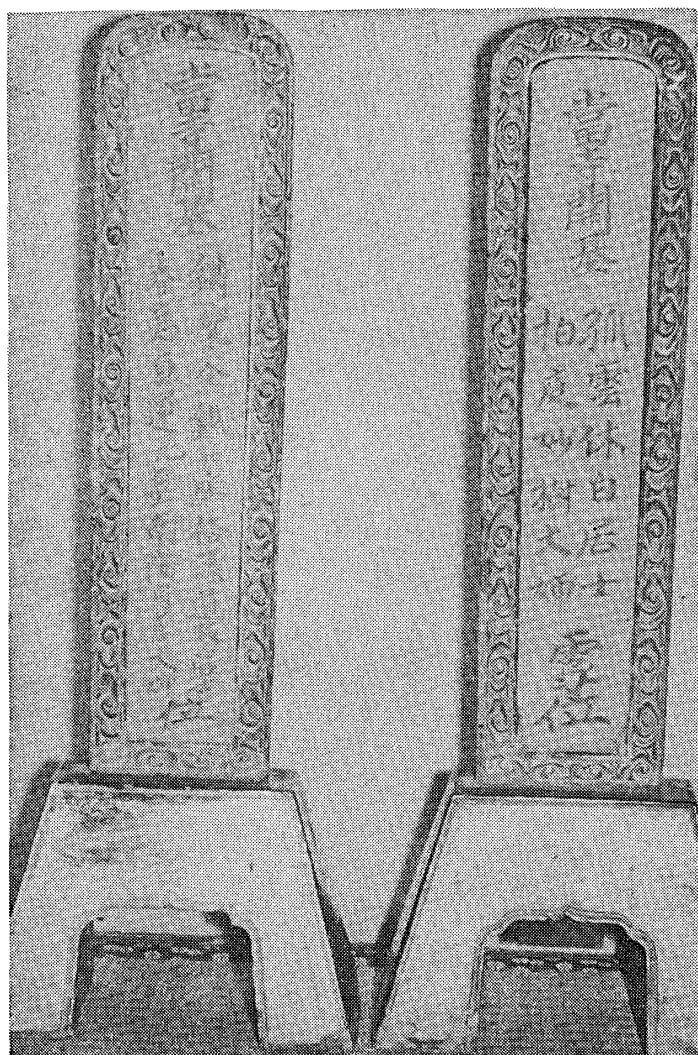
ことくせよ、塔を建、像を安置する事なかれ、碑を立事なかれ、謚号を求める事なかれ、木牌を本山祖堂に納事なかれ、年譜行状を作事なかれ。

そこでやむをえず、門人たちは、この遺命のとおり、全身を東海寺の西北の丘に葬り、そのうえに一本の松を植えただけであった。家光は追慕の念に堪えず、東海寺に法会を修せよと命じたが、しかし門人たちは断った。塔を造営しようとしたが、これも遺言によつて不可能である。ただ荊蕀をはらい、土地を夷らにするだけにとどめた。いま、東海寺にある沢庵の墓は、のち小堀遠州がつくったというが、これは石垣で囲んだ中央に、いわゆる沢庵石が一つ鎮座するのみである。いかにも沢庵にふさわしい。

沢庵は冥子、且過子、噴嚏子、南海浮生、東海暮翁、十竹叟、菊節、但陰狂客、迅流波などと号した。昭和一九年（一九四四）、三百年忌にちなみ、普光国師の敕号が宣下されたが、この普光の号も沢庵にふさわしい。沢庵の法嗣は、沢庵自身のことばの通り断絶してしまったけれども、その人格と家風をしたうひとびとは、時代をこえ、宗派をはなれて、今後ますますひろがってゆくであろうからである。

二、松林寺の諸資料

すでに書いたとおり、曹洞宗、雲黄山松林寺は、富山県下新川郡朝日町泊（国鉄北陸本線泊駅下車。徒歩で一〇分ばかり。富山県立泊高等学校のそば）にあるこの地方の大刹であって、左方に日蓮宗、右方に真宗の両寺院を擁立する位置にある。



岡家位牌

松林寺藏

一堂字間数 前口 十三間三尺

転堂宇造立以来変換ナシ
滅スル所ト為リ同三年九月字金菅ナル所ヘ移
開基ト為ス享保元年十月一日ニ至リ怒濤ノ壊
所ヲトシ一字ヲ創立シ松林寺ト称ス之ヲ当寺
後同三年四月泊町村ノ東北字方今本屋敷ナル

瑞竜寺第四世住職ニシテ寛文元年五月隠居シ
同三年四月泊町村ノ東北字方今本屋敷ナル

一 由緒 祖先在田春竜ト云フ者原越中国礪波郡高岡町

一本尊 釈迦如来

禅宗曹洞派

松林寺

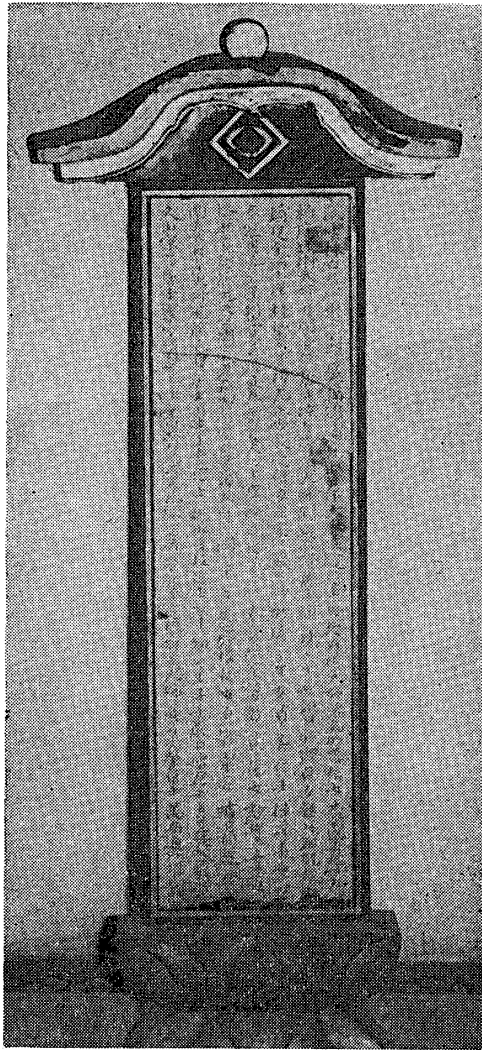
町瑞竜寺末

能登国鳳至郡寺口村総本山総持寺下越中国礪波郡高岡

石川県管下越中国下新川郡泊町村貳百六十貳番地字金菅

基一翁宅念和尚 承応三年午六月二十九日化、また回向双紙には、「前住覚海円大和尚」の名が、それぞれ記されている。
明治一三年二月、ときの住職、一九世法山瑞麟が、石川県庁へ提出した文書の控えをみると、明治一三年二月の時点における松林寺の住所、所属、本尊、由緒、堂宇、境内地、境外所有地の地価など、檀徒数、石川県庁迄距離里数、役員の概況が、おおよそ知られるのである。今となつては、この種の史料も散逸の一途をたどり、ようやく貴重なものとなりつつある。ここに掲げておくのも、今後なにかの参考になるであろう。

松林寺の記録によると、まず、開山は、在田春竜大和尚（寛文七年九月廿日寂）で、このあと、二世中興易天元周大和尚、三世決山喜大和尚、四世大機円大和尚、五世独了眼大和尚、六世雪東猶大和尚、七世仙巖洲大和尚、八世的箭中大和尚、九世大安王大和尚、十世徳苗源大和尚、十一世越山超大和尚、十二世大円峯大和尚、十三世祖岳宗大和尚、十四世一王本大和尚、十五世朝宗元大和尚、十六世顕明山大和尚、十七世大洲竜大和尚、十八世祖関勇道大和尚（明治十一年二月二日寂。かつて大本山総持寺輪番住職を勤めた）、十九世法山瑞麟大和尚（明治三十三年三月七日寂）、廿世冠越礪山大和尚（昭和三十一年一月十四日寂）と次第し、現住の廿一世祐芳大和尚に至る。このほか、過去帳をみると、「開



岡家位牌・「東海開山沢庵大和尚」の名もみえる
松林寺蔵

奥行 八間

一 庫裏間数 前口 十式間

奥行 七間三尺

一 境内坪数并地種 千五百六十式坪民有地第一種松林寺外式名所有地

一 境内仏堂二字 内式百四十九坪 民有墓地第二種松林寺所有地

五百三十四坪 民有地第一種松林寺所有地

七百七十九坪 民有地第一種下新川郡沼保村柚

木権平外名所有地

観音堂

本尊 観世音菩薩

祖師堂

祖師 永平承陽大師

由緒 不詳

由緒 但馬国出石ノ城主山名民部少輔ノ守本尊ノ由ニテ其老臣

岡彦兵衛ノ長男与三右衛門ヨリ当寺開基在田春竜江寄附

スト雖更ニ歳月ヲ紀セス爾後文久三年五月当寺第十八世

勇道ニ至リ堂宇ヲ創立セリ其他不詳

建物間数 前口 三間

奥行 五間

建物間数 前口 三間

奥行 五間

一 境外所有地

耕地総反別沓町六反式畝九歩 沼保村字横崎外五字

地価総計金九百八十七円八十七銭七厘

山地反別三反四畝六歩 泊町村字城ノ腰

宅地総反別七畝七歩 沼保村字神田外一字

地価総計金三十七円十銭八厘

一 檀徒人員 六百八十九名

一 石川県庁迄距離里数三十沓里十八町

以上

明治十三年二月 松林寺住職 訓導在田瑞麟

下新川郡泊町村式百九十三番地平民

檀徒総代 大菅四郎右衛門
同郡同村式百九十四番地平民
同 金森伝平
戸長 水埜十平

A 玉室宗珀和尚の書簡

松林寺には、玉室宗珀和尚の書簡一通が秘蔵されている。この書簡は、もと加賀前田藩主の書庫に伝わっていたもので、かつて前田家の書庫番を勤めていた宗悦居士・小沢助左衛門氏が、昭和二六年八月、その由緒にもとずいて、松林寺に寄託した。ときに、小沢氏は、「松林寺開扉仏縁起」や「岡与三右衛門由緒」も併せて写し、なお後学の便宜をはかつて、書簡の丁寧な解説を附せられた。この玉室の書簡一通は、松林寺にとつても、岡家にとつても、いま沢庵との血縁を探るにあたつて、きわめて大切な唯一の根本史料といふべきである。それが、いつ、どうして前田家に迷いこんだのかはわからないが、のちにこれを発見し、その意義と重要性を洞察し、これを私蔵することなく、解説文を添えて、菩提寺の松林寺に奉安した宗悦居士の美挙には、心うたれるものを感じる。私にとつて小沢氏は、一面識もない未見の人であつたが、その解説文の内容には、一、二のまちがいがあるとはいへ、きちょうめんな筆蹟に言いようのない親しさをおぼえた。宗悦居士の親切を偲び、これを広く世に伝えるため、解説を原文のまま転載しておく。

玉室和尚書簡解説

此の書簡ハ京都大徳寺第四百七十七世玉室法諱宗珀の真蹟なり、玉室は京都の人姓園部氏、瞳眠子と号す、円鑑国師春屋宗園に嗣法し慶長十二年大徳寺に出世す、後陽成天皇勅賜して直指心源禪師と号す、寛永十八年示寂寿七十、

この書簡は殆んど三百年外のものなれハ、文体筆致ともに今日通用せざるゆへ、試ニ改め書せハ左の如し、

以上(備考。以上は謹上の誤読―東)

芳札披見欣然の

至りに候 不慮の仕合にて

爰許滞留せしめ候

沢庵拙僧息災ニ候

沢庵への書状相届

可申候 返書後便ニ

可被申候 来春ハ可

罷上候条京都より

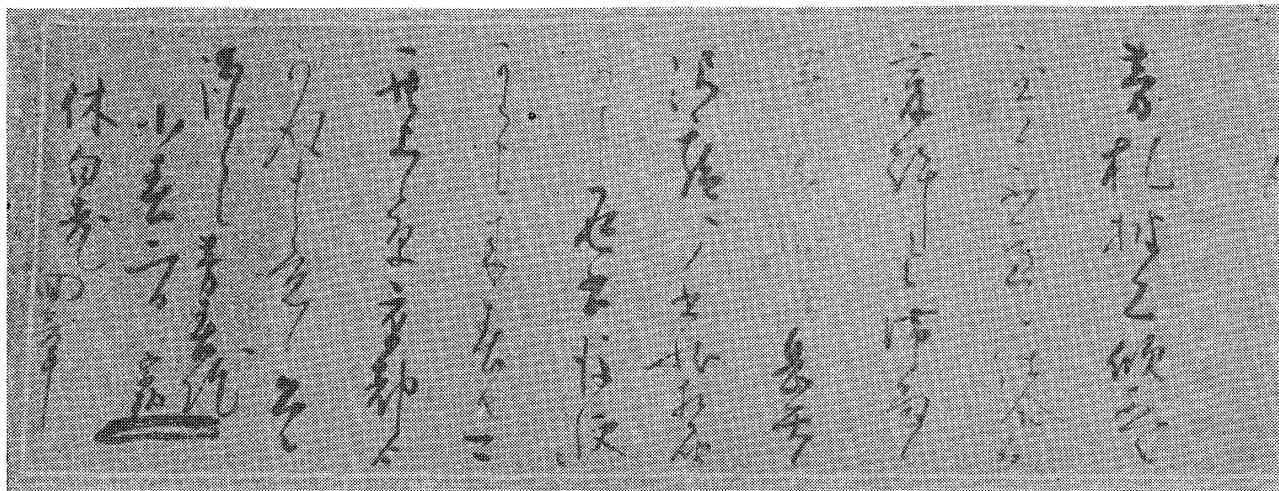
可得貴意候 恐々

謹言

小春二日

芳春院

宗珀 (花押)



玉室宗珀和尚書簡

松林寺蔵

休白老

回章

芳春院と署名せしハ加賀藩三世利常卿先妣芳春夫人のため二一寺を大徳寺中に初め玉室を請じて住持せる二依る、(備考。芳春院は前田利家の正室まつハ芳春院と号すハが建立したことはすでに論じたとおりである。利常の先妣はチヨといい、芳春院(まつ)ではなく、また、利常が、芳春院のために建てたのではない―東) 又宛名の休白ハ休伯の略にして実に当山松林寺の開基法諡孤雲休伯居士なり、(備考。孤雲休白居士は開基ではない。開基の鑄叟全鉄居士の父である―東)、休伯ハ但馬出石人にして、医を業とし偶々加賀金沢ニ在り、境関奉行長谷川宗兵衛と旧あり、その勤めにて泊りに来り住す、其子与三左衛門「十村」に命ぜられ泊り傍近四十余村を支配せり、松林寺の創建ハ与三左衛門父子並ニ夫妻の慈力に成りしことハ、開基位牌の背ニ広海和尚(備考。松林寺開基位牌背記には、覚海円和尚の名は見えるが、広海和尚の名は無い―東) たしかに広海と覚力何代の住持ニヤ(備考。広海ではなく覚海円大和尚のこと。回向双紙にはただ前住とのみある。富山県海岸寺第十九世。宝永五年十月十九日寂―東)。参照せられたし

朱髻ニて漢文もて頌述せり、また書簡ニ沢庵への書状云々とあり、沢庵ハ休伯と桑梓を同くし、(備考。のちに紹介するが、『松林寺開扉仏縁起』には、沢庵は但馬出石の山名家の家老岡彦兵衛の舅としていたのであって、休泊と従兄弟とはしるされていない―東)

従兄弟たりしハ開扉仏観音大士縁起ニ記したりと覚ゆ、参看せられた

し、沢庵ハ法諱宗彭玉室とともに春屋に嗣法し（備考。前節で論じたとおり、沢庵は玉室とともに春屋に学んだことはあるが、そして玉室は春屋に嗣法したが、のちに沢庵は一凍に参じ、一凍の法を嗣いだ。沢庵は春屋に嗣法しない―東）嘗て大徳寺の住持問題につきて幕府の諱忌に触れ奥州赤館ニ配流（備考。玉室は奥州赤楯に配流されたが、沢庵は上ノ山に配流されたことも、前節で述べた―東）せられしことあり、正保二年七十三にして示寂せり、

さてここまで記述せしが、世間離れし境涯の身辺ニハ、史料ハ元とより一冊の年表もなく胸臆を辿どりて綴り合せたり、

摺筆に臨みてまた一事の近懷措く能ハざるものあり、嘗て亡友金森松裁ニ請ひて家蔵の旧記諸書を覧觀せし際休伯手沢の杜律集解五本を見たり毎冊之皮に小階にて岡休伯と署名せり濃墨漆の如く筆致端正にして自ら其人を想見せしめ今猶ほ目睫の間に往来するを覚ゆるなり、

昭和二十六年八月

宗悦居士

拝稿

右の通りである。この解説文は、いま文中に「備考」として訂正しておいたように、一、三の誤解がまったく無いわけではないが、それを責めるのは、宗悦居士の「史料ハ元とより一冊の年表もなく胸臆を辿どりて綴り合せた」る「世間離れし境涯の身辺」を忖度せざるものというべきである。非礼であろう。ただ、私は、この書簡の内容に関して、いささか補説しておかねばならないとおもう。

この書簡は、芳春院住職の玉室宗珀が休白にあてて差し出した回章すなわち返書である。いま、文面を現代風に意訳すれば、ざっとこんなことになるであろう。「お手紙を拝見して、うれしいかぎりです。慮らずも、ここに滞留することとなりました。沢庵も私も元気でいます。沢庵への書状は確かにあづかりましたから、必らず届けます。あなたに対する沢庵の返事は、いずれ後ほど差し上げるようにいたさせます。なお、わたくしは、来春には上洛することになる筈ですから、その折は、京都から、あなたの御意向をうけたまわりたいとおもいます。つつしんで申しあげました」。

これによれば、休伯は玉室を通じて、沢庵に応答を必要とする要件を依頼した。おそらく、休伯と玉室と沢庵の三人は、かねて熟知昵懇の、あるいはそれ以上の密接な間柄であるのであろう。玉室は、依頼事を承知した。もちろん、それはどんな事柄のことか、この文面だけでは、具体的なこととはなにひとつ見当がつかない。けれども、「不慮の仕合にて爰許滞留せしめ候、沢庵拙僧息災ニ候」という個所から推して、私は、玉室と沢庵らが「大徳妙心法度事件」を惹起して、赤楯、上ノ山に配流されていた寛永六年（一六二九）七月から寛永九年七月までか、寛永九年七月から公命によって大徳寺へ帰る寛永十一年までの江戸駒籠の堀丹後守別荘中のころか、いずれかにちがいないとおしはかるのである。御氣嫌伺いや身の安否を問うだけではなく、なにかもう少し特定の事柄について、休伯は沢庵の言葉が欲しかったのであろう。「沢庵への書状相届可申候、返書後便ニ可被申候」というのが、そういうことを暗示している

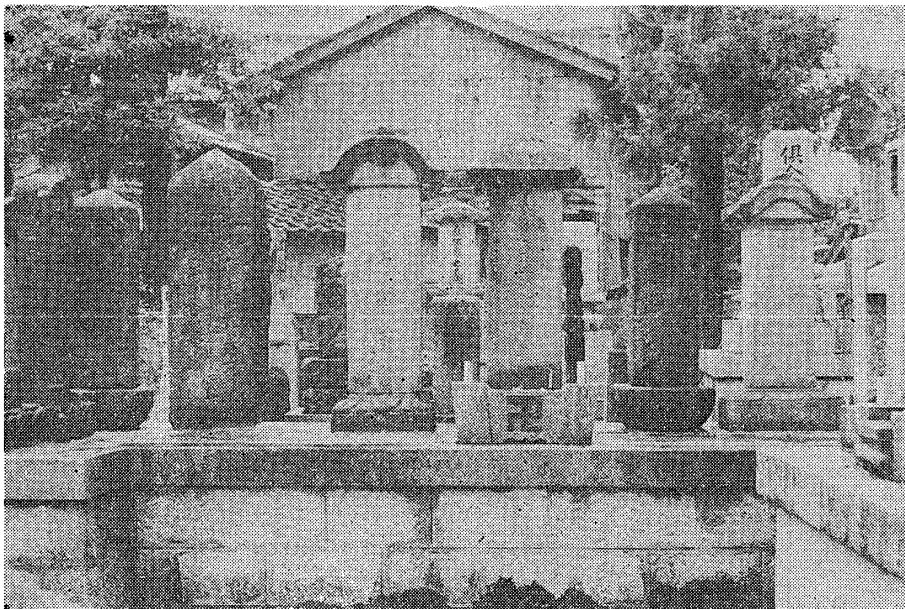
いか。しかもそれは、少なからず玉室にも関わりの存することであつたにちがいない。「来春ハ可罷上候条京都より可得貴意候」とむすんで、休白の「貴意」を得たいと言っているのである。この書簡は、玉室に師事する沢庵が大徳寺で熱心に修行をしているからどうか安心してくれということを、玉室が沢庵の実兄である休白に出した書状であると解釈する向きもあるが、これは、誤解である。私は採らない。

なお、玉室宗珀、沢庵宗彭、江月宗玩の三人は、いわずと知れた紫野大徳寺の住職であるが、三人の墨蹟は、茶人の間や書道芸術の方面で、すこぶる高い評価を得ている。最近、たとえば、堀江知彦の編による『墨跡』⁽²⁸⁾をみると、江戸時代における高僧の代表的墨跡として珍重されているものとして、大徳寺の玉室宗珀、沢庵宗彭、江月宗玩らの名も挙げられている。

B 松林寺開扉仏縁起

松林寺の開扉仏とは、木造の聖観音菩薩の立像一体（御丈三九センチメートル、横幅一一センチメートル。台座等を含めた高さは七〇センチメートル）である。いま同寺の本堂内に、極上等の御厨司を設け、光背を新装して奉安されており、昭和四一年五月二二日、朝日町教育委員会は「沢庵生家三位組十村役岡与三右衛門政春の墳墓（史跡）」とともに、朝日町指定文化財（彫刻）にさだめた。この観世音菩薩を拝する

に、端麗にして優雅、すこぶる古色に富み、凡庸の作にあらざることが一見して知られる。むかしから七年に一度、泊町挙げての御開扉供養が修行されているというが、まさに秘仏というにふさわしい端嚴微妙相好仏で、この御開扉供養にあたつて読誦する一巻の文章が「松林寺開扉仏



岡家の中央正面墓地

松林寺墓地

縁起』なのである。然しながら、この文章は、いつ、だれが撰述したのかは明らかになしえない。原文は次のようである。

当檀御厨司之内ニ安置シ奉ル正観世音菩薩ハ春日一刀三礼之作也、

抑其由来ヲ尋ヌルニ但馬国山名之城主山名民部少輔之守本尊也信長公ノタメニ落城アリシ時其家老岡彦兵衛此尊像ヲ守護イタシ丹波国永沢寺玄海和尚ハ竹馬之近附ニ先ツ彼方ヘ落行ケリ其後舅沢庵和尚者江戸表品川東海寺ニ安置セムト思立チシニ其夜尊像告テ曰ク北海之彼岸ハ薩埵結縁之地也ト明ラカニ告ゲ給フ依レ之嗚呼不思議也ト遙ニ当国江下リ其節堺御関守長谷川宗兵衛者元ヨリ武門之懇親ニ付尋ネ立^テ立^テ候得者右宗兵衛方ニ逗留致シ暫ク足ヲ留居ル内実子岡与三右衛門義御上分御扶持人十村役ニ取立ラレ弥泊町居住ニ相定メ兼而悲願之御告ヲ蒙リ此地海岸高岳之勝跡者補陀落因位之御誓示現度生之時節也ト想ヒ当寺開山在田和尚ヲ招待イタシ寛文三年ニ松林寺ヲ新ニ建立シ此尊像ヲ納玉ヘ夫ヨリ大悲不思議之願力在々所々ニ溢レ貴賤上下之ヘタテナク老若男女之差別ナシ一念皈命之輩者病患憂悩モ立所ニ愈怨賊敵モ味方トナリ必ス感應不空永ク当山ニ秘藏シ奉ル然ルニ時移リ人衰テ畢竟難遇之勝縁ヲ失再ビ三途之苦ヲ受ケシ事ヲ憐ミタマ々々信心之同俗(威力)ヲ募リ七年ニ一度之開扉ヲ定志ヲ和合同塵之誓ニ継キ纔ニ一華一礼一称名之功德ヲ以テ普ク難値之願輪(竭仰之)ニアハン事ヲ欲ス所^レ希者十方有縁之衆生此尊像ニ帰シテ同ク一蓮タクシヤウノ台ニ登ラン^ノ右尊像由如斯信心之輩者深ク拜礼ヲ遂ラル可キ者ナリ

C 岡与三右衛門由緒

いうまでもなく、岡姓は沢庵の生家といわれる岡彦兵衛を先祖にもつ岡家のことである。そして、岡彦兵衛を祖と仰ぐ岡家の血縁は、泊町の十村役であった「岡与三右衛門」、「別家」の「岡七右衛門」、「岡良伯」、「岡小左衛門」、「道下村」の「弥兵衛」、「弥三次」、「泊町仏生寺村谷内」の「渡辺弥太夫」などに分流していったことが、ここにとりあげる「岡与三右衛門由緒」によって判明するのである。この史料は、奥書によると、天保一四年(一八四三)八月六日、泊の岡屋善次が持参した記録を、吉田平十郎康就が書写したのである。ただし、そのあと、弘化二年(一八四五)七月十六日という年記が見えるから、最終的には、この全文は、弘化二年七月一六日以降の成立となるわけである。もとより、吉田平十郎康就がいかなる人物であるか、そのほかのことも一切不明である。いま、以下に再録するのは、宗悦居士の謄写によっている。次のとおり。

泊町十村岡与三右衛門由緒由来書

但馬国出石城主七十三万石山名民部少輔善高公家臣
家老由井某 八木某 稻葉半左衛門 岡備後跡彦兵衛メ四人之内也
元祖彦九郎慶長八年ニ泊町ヘ見ル(初メハ境ヘ見ル由同所奉行長谷

川宗兵衛ノ取立也

岡休伯政次 正保四年十二月十二日八十二歳ニテ卒
ス内室ハ宮崎村竹屋徳右衛門娘

二代

嫡子彦丞政保 当御郡役 元禄三年六月
廿二日七十二歳ニテ卒
山廻新開才許相勤
内室玉屋与左衛門娘

二男加藤次別家ノ

後岡七右衛門岡良

伯共先祖也

代々医業也

三代

与三右衛門政春 御扶持十村宝永七年十一月十四日
七十四歳ニテ卒ス

右与三右衛門二男雅楽ノ助善次政房別家ノ後小左衛門ト云 但馬

屋善次先祖也 後ニハ善右衛門トモ云御旅屋也 御蔵宿也書面有

リ

三男与三治

四男清右衛門

歳三十二也

四郎左衛門養

子四郎左衛門

四郎次郎ト云

娘横尾善左衛門室赤川 岡政次兵衛方
孫左衛門室

四代

役義名代仕早世也

彦九郎 宝永元年八月廿二日 四十二才
ニテ卒ス

二男新左衛門別家道下村弥兵衛弥三次先祖

五代

役義名代仕居ム

彦之丞御追族被仰付家断絶仕ム二十三才

是ニテ泊町

十村岡与三右衛門家断絶也

右先祖彦兵衛儀山名家と織田信長公と合戦之節右 但馬国
出石城落城之時討仕

ム事

右泊町岡与三右衛門由来書

天保十四年卯八月六日泊町但馬屋或ハ岡屋善次相見ヘ右之通持参ニ付

写取申ム

尤此許分も泊町与三右衛門書物写取行申ム事

右天保十四 卯 年八月六日泊町岡屋善次持参ニ付写取申候

吉田平十郎

泊町仏生寺村谷内渡辺弥太夫者此者別系也上新川郡仏生寺村より引越也依而渡辺弥太夫ト云姓大ニ違ヒ也 弘化二年七月十六日再改申ム

D 松林寺開基岡家位牌背文

松林寺開山堂に奉安する檀信徒諸位牌のうち、同寺の開基岡家の位牌は数種に及ぶ。これらの位牌を丹念に調査してゆくと、そのなかから背文が二種発見された。その一は、「松林寺開基藏位牌背記」であり、いまひとつは「岡宝洞石光」の記録したものである。はじめの「松林寺開基藏位牌背記」は、岡家の何某が書いたのか、松林寺の歴住世代の誰が記したものか、それはいつのころか、なにをよりどころにしたのか、なんら手がかりはない。あとの岡宝洞石光の記録は、文中に「惣元祖孤雲休白居士正保四從寂年至天保三一百八十六年也」とあるから、おそらく天保三年の成立であろう。「天保三辰十一月十日」の年時もみえるから、十一月一〇日以降であろう。位牌を新調ないし再造したときに、あらためて背文を記入したものと想像される。判読が困難な個所もあるが、例によってここにそのまま転載してみよう。

(a) 松林寺開基藏位牌背記

(表)

当寺開基 鑄叟全鉄上座 格源道致居士 位
春窓貞運尼上座 南陽自薫大師

(背)

寛文中但馬氏彦之丞法諱全鉄者其婦貞運尼同志而訟公府以上林村松林寺旧基移今泊邑且革為知識法幢之所貞享年中又嫡子与三右衛門法名道致者其婦自薫尼暨住持覺海広円和尚相与謀再興殿堂斤所有佛像法器無不畢備也玆知食法兩輪不已而軫干今実此四靈護法之力也故立牌於開基牌香夕燈永可斷則可耶

覺海円和尚当山住二十一年其秋富士山移転海岸寺示寂実是当山前住持

(b) 岡宝洞石光の記録

当家元祖宝曆七丑泊町産岡一統家七代目也

岡一統家先祖但馬出石之城主岡備後守男応仁乱ニ親子討死之後医業相行来慶長八年泊谷地ニ住居岡休貞ト相唱正保四十二月十二日八十四卒ス岡伊三良ト称荒川肝煎清兵衛聳入妄不正ニ付離縁安永八年江戸ニ趣天明八年ニ帰国改与三助ト金子五百両ト持参寛政三泊中町ニ家作^{三十}同九年栲山野嶋古友之助殿手代ニ罷越致居住^{四十}与左^{五才}

門ト唱^{白跡ハ能口ニ付一頭加越能三州和国ノ随文化十四壬十一月八}

日夜栲山村ニ打^{ホセート申}大変出来依而文化^{十二}七月六日^{五十}此入^{九才}

膳ニ引越又候与三良助ト返改文政元川除方御用仕仰付文政三病身ニ

罷成致剃髮^{六十}号東作道人其後大本山惣持寺ニ入首座号御免許^{七十}才^{四才}

リ繪
写ス天保三辰十一月十日七十六才寂ス 心源宗清首座 惣元祖孤雲休
從寂年至天保三 泊町松林寺開基也 白居士正保四
一百八十六年也

岡宝洞石光敬改焉

三、岡家の系譜と墓地

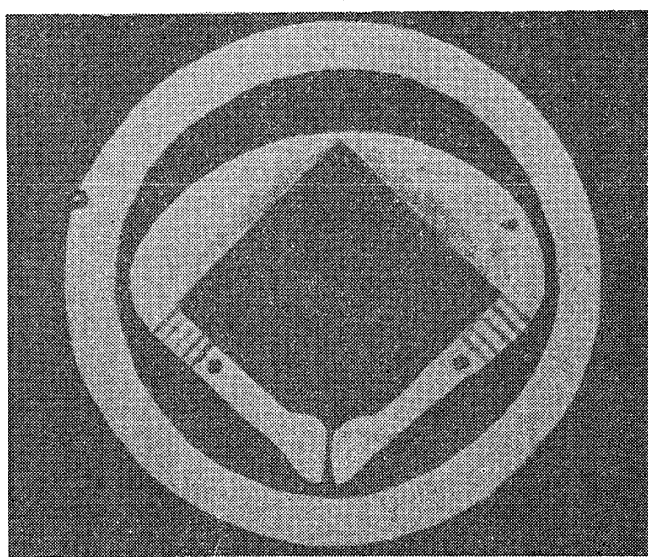
孤雲休白居士を先祖とする岡家の血縁は、本家から別家へ、いくつかの流れに分れ、その間に何度か栄枯盛衰をくりかえしたことであったろう。然し、そうした岡家の歴史の変遷を悉く明確に把握することは、なかなか難しい。だいいち、岡家には完全な家系図は残存していないからである。そこで、松林寺の開基となった岡家系譜を調査する資料としては、これまでに掲げた松林寺所蔵の岡家諸位牌および松林寺過去帳、岡家所蔵の先祖代々過去帳、昭和四七年夏、私に提示された野島二郎氏の考証になる『岡家系譜考』、『入善岡家系図』のプリント、その他が、その主なものとなるであろう。然しながら、これら資料の記述内容を対照すると、相互に混雑し、脱落、誤記がみえ、史的公正さを欠いて、少なからず不明の部分をかかえている。この点に留意しながら、なかならず沢庵との関連において岡家初期の状況を重視しながら、いま改めて岡家の系譜に、私なりの検討吟味を加えてみたいとおもう。

岡備後。岡彦兵衛の父である。但馬国出石の城主七三万石の山名民部少輔善高の四家老のひとり(『岡与三右衛門由緒』。以下『由緒』と略記)というが、そのほかのことは不明。ついでに言っておくと、「岡一統家

先祖但馬出石之城主岡備後守男応仁乱ニ親子討死之後医業相来」(『岡宝洞石光の記録』)として、あたかも岡備後が但馬出石城主で、その男子ともども応仁の乱で討死した云々と伝えているが、これは明らかに史実に反する。

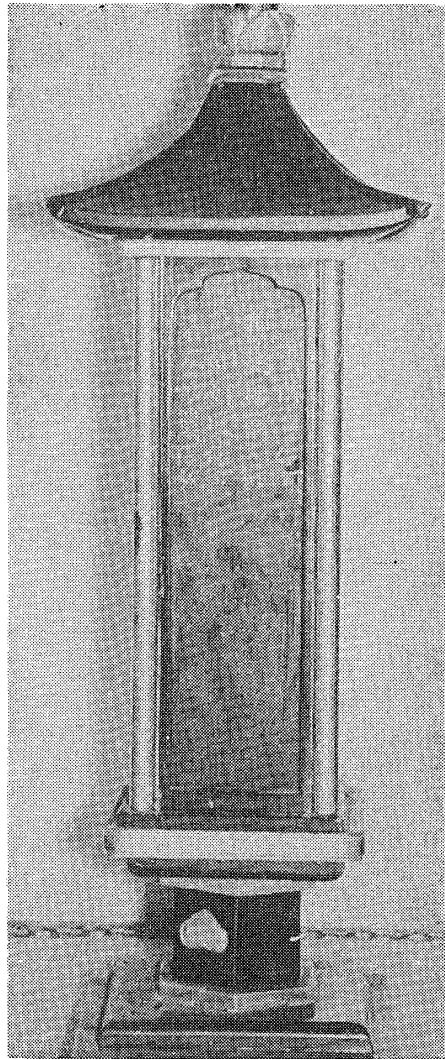
岡彦兵衛。父の備後を相続して、山名の家老であった。(『由緒』)。

元祖岡彦九郎。一般の史書で知られるように、山名宗全五代の孫・祐豊は、天正年中に出石に築城したが、天正八年(一五八〇)五月十六日、織田信長の麾下、豊臣秀吉に攻められて、病床の老主祐豊は城中に囚の身となり、五月二一日、七〇歳をもって死去、その子氏政は因幡に



岡家の家紋・二丁の鎌があい対している珍しい紋章である。松林寺蔵

岡家位牌



松林寺蔵 岡家位牌

逃亡して、山名氏は亡びた。

このとき、家老の岡彦兵衛(『松林寺開扉仏縁起』(以下『縁起』と略記)山名民部少輔の守本尊である聖観音像を守護して、ひそかに城を落ちのびた。この聖観音こそ、まさに松林寺の秘仏とされるにいたった仏像である。まず、幼な友達であった摂丹境の古刹永沢寺(曹洞宗)に住む玄海和尚のもとにかくれた。その後、沢庵を訪問しようとおもいたち、江戸表は品川東海寺へ向って出発したという(『縁起』)。しかし、これもなにかの誤りである。東海寺の落成は寛永一六年(一六三九)である(『万松祖録』)からである。それはそれとして、江戸出発を決意したその夜、聖観音が夢中に示現して、北海こそ勝縁の地であると告げたため、越中へ下り、堺の関守すなわち奉行・長谷川宗兵衛をたずね、同家

川宗兵衛はいまだ奉行ではなかった。いや、だいいち、境の関所そのものが開設されていなかった。ここにも、なにかの誤伝がある。どうも、岡備後、岡彦兵衛、岡彦九郎の三人の関係がはつきりしない。今後の課題としてこのことを指摘するにとどめておく。

岡休伯政次。べつに、但馬屋善次(『松林寺過去帳』)とも称え、また、野島氏は、泊彦兵衛家初代に当てている(『岡家系譜考』)。松林寺過去帳は、まずその筆頭に但馬屋善次の戒名・孤雲休白居士を掲げ、以下、但馬屋という屋号を列挙しているのであるが、これは但馬屋が但馬の出身であることを意味すると判断して間違いないであろう。宗悦居士が、『玉室和尚書簡解説』において、「休伯ハ但馬出石の人にして、医を業とし偶々加賀金沢に在り、境関奉行長谷川宗兵衛と

に逗留した(『縁起』)。そのうち、慶長八年(一六〇三)に泊町へ移居した(『由緒』)。然し、『境関所史』の年表によれば、慶長一九年(一六一四)、境関所は治安維持を目的として開設され、長谷川宗左衛門ら三人「百石三人之足輕」となり、宗左衛門がその首席であった。寛永一六年(一六三九)、宗左衛門は辞任し、嫡子の宗兵衛が第二代奉行となった。万治三年(一六六〇)長谷川宗兵衛は自害を命ぜられ、渡辺八右衛門が三代目の奉行となり、寛文二年(一六六二)初代奉行長谷川宗左衛門が歿したとなっている。もし、この『境関所史』に従うならば、慶長八年以前に、長谷



雲黄山松林寺山門

の忌日は異説があつて、正保四年（一六四七）一二月
一二日（『由緒』）、あるいは、正保四年十一月（『岡清
家先祖代々過去帳』）とするが、私は松林寺過去帳の
正保四年六月一二日とあるのを採用するのが隠当であ
らうとおもう。世寿は八二歳であつた。

岡彦之丞政保。但馬屋与三右衛門（『松林寺過去
帳』）（『由緒』）とも岡与三右衛門（『縁起』）と
も名づける。泊の近辺、四〇余村を支配する「十村
役」を命じられた。加賀藩に十村を置いたのは、慶長
九年（一六〇四）前田利長の時代である。能登鳳氣至郡
へ本保与次右衛門長広を派遣し、その土地の老百姓を
して数村の政務に与らしめたのが始まりで第三代利常
にいたつて確立されたものである。名づけて十村肝煎
といった。十村の名称は、十箇村を一円として支配す
るところから起つたもので、また、肝煎とは、支配監督

旧あり、その勤めにて泊りに来り住す」としているのを、『松林寺
開扉仏縁起』の「（前略）但馬国山名之城主山名民部少輔（中略）家老
岡彦兵衛（略）当国江下り其節堺御関守長谷川宗兵衛者元ヨリ武門之懇
親ニ付尋ネ立竝^{タマ}ラレ候」（後略）と対照してみると、岡彦兵衛との混乱
がある。いずれが是か、わからない。内室は、宮崎村の竹屋徳右衛門の
娘（『由緒』）で、戒名は柏庭妙樹大姉、慶安五年（一六〇〇）一七日
に死没（『岡清家先祖代々過去帳』）。行年は不明。なお孤雲休白居士

するの意である。即ち、一村を統ぶる者を単に肝煎と称し、組合村を統
ぶる者を十村肝煎と称した。⁽³⁰⁾寛文年中（一六六一—一六七二）、その内室
すなわち玉屋与左衛門の娘・春窓貞運尼上座（元禄二年二月二十九日歿
『岡清家先祖代々過去帳』）とあいはかつて、もと上林村（神林村）に
在つた松林寺を泊邑の金萱^{かなすが}（現在地）に移した（『由緒』）。もつと
も、さきにかかげた明治一三年（一八八〇）二月、松林寺^{ありた}在田瑞麟がと
きの石川県庁へ提出した文書とは、かなりの相違点があることに注意し



松林寺 生家和尚庵の墳墓碑

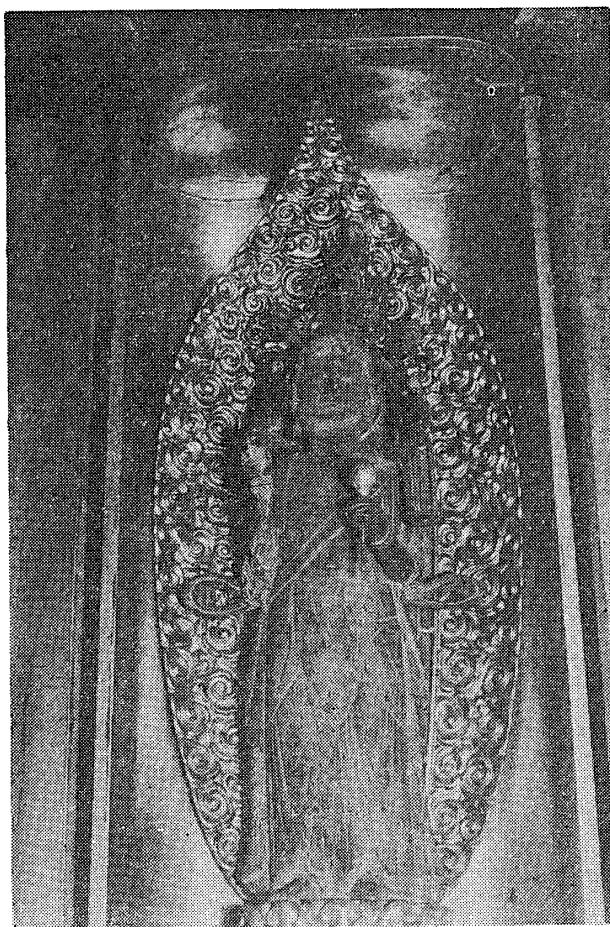
にものがたっているといえよう。

ところで、『岡与三右衛門由緒』によれば、元祖彦九郎、休伯政次、彦之丞政保、与三右衛門政春と次第し、この三代与三右衛門政春に、彦九郎、雅楽ノ助善次政房、与三治、清右衛門、四郎次郎、娘の六男一女あり、長子の彦九郎は四二歳で死亡、彦九郎の長子彦之丞は二三歳で早世したため、泊の岡家の宗家は断絶ということになった。政春の次男雅楽ノ助善次政房は別家して、小左衛門と言い、この系統は岡善次という通称であったが、やがて絶家、のち再興して、いま朝日町泊の岡清氏に至る。また、政春

の第三子与三治の系統は、その子与三治に二子あり、長子の与三治の系統はやがて絶家し、次子の伊三郎のちの与左衛門の系統が、与左衛門家と弥三次家に分れ、いまにつづいて与左衛門家は岡進家へ、弥三次家は入善町入膳の岡定吉氏に至り、いまその当主となっている。ここでは、入善町岡定吉系の系譜を考証してかかげるにとどめておく。第四六頁から第四九までの表がそれである。

さて、つぎに、岡家の墓地について触れておこう。松林寺の本堂に向って右側の一部が檀信徒の墓地となっているが、松林寺庫裡に最も近接した一角が、松林寺歴住世代の卵塔墓であり、この歴住塔の隣地が、岡家の墓地である。岡家の墓地が松林寺世代墓地と隣りあわせを占めていることは、とりもなおさず両者の関係の密度を示す証左にほかならないが、ここで岡家墓地の配置をしるしておく、(1)(2)(3)(4)(5)となってい

なければならぬであろう。そのうち、貞享年中(一六八四—一六八七)にやはり「御扶持十村」の役であった(『由緒』)、その嫡子与三右衛門政春すなわち格源道致居士・宝永七年(一七一〇)十一月一日歿(『松林寺過去帳』)は、その婦南陽(養)自薫大姉・正徳四年(一七一四)一〇月二八日歿(『松林寺過去帳』)とともに、松林寺覚海広円和尚を援助して、松林寺の堂宇、仏像、法器などを完備したという(『背記』)。このような事情からと思われるが、松林寺には、『当寺開基孤雲休白居士柏庭妙樹大姉靈位』、『当寺開基鑄叟全鉄上座格源道致居士春窓貞運尼上座南陽自薫大姉位』と三代六名が、その開基として祀られている。彦之丞政保は、元禄三年(一六九〇)六月二日の歿(『松林寺過去帳』)となっているが、この夫妻が、それぞれ上座、尼上座と出家の僧名になっているのは、よほど信心に厚い人であったことを十分



松林寺秘仏聖観世音菩薩



富山県下新川郡入善町入膳

岡定吉家

《入善町岡家系譜考》

但馬出石山名家家老

(岡備後)

(岡彦兵衛)

(岡彦九郎)

但馬屋初代

岡彦兵衛政次

正保四年六月二日歿(八二歳)
孤雲休白居士

(室宮崎村竹屋徳右衛門娘)
柏庭妙樹大姉

松林寺開基

岡彦之丞政保

元禄三年六月二日歿(七十二歳)
鑄叟全鉄上座

(室玉屋与左衛門娘)
春窓貞運尼上座

京都柴野大徳寺第一五三世、江戸品川東海寺開山
沢庵宗彭

天正元年二月一日生誕

正保二年二月一日遷化(七三歳)

御扶持十村

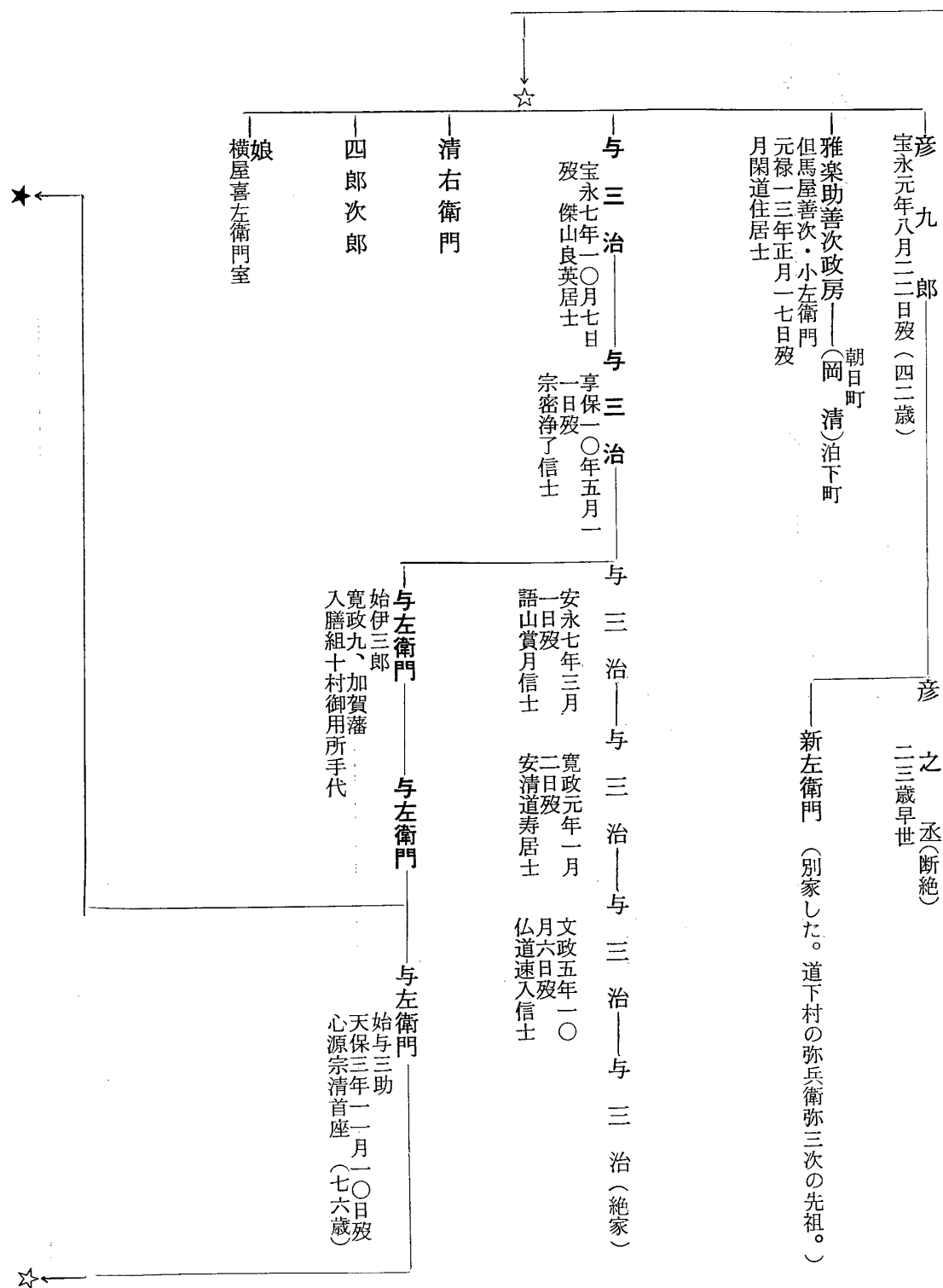
岡与三右衛門政春

宝永七年一月一四日歿(七四歳)
格源道致居士

(室南陽自薫大姉・正徳四年一〇月二八日歿)

加藤次(別家した岡七右衛門岡良伯の先祖となる。代々医業)

☆



与左衛門
始与三助
慶応三年八月二四日
鉄翁良閑居士
与左衛門
始与三助
明治九年七月二八日
鉄岩淳月禅定門
与左衛門
号如峯
明治四三年三月一八日
禅心院玉巖如峯居士

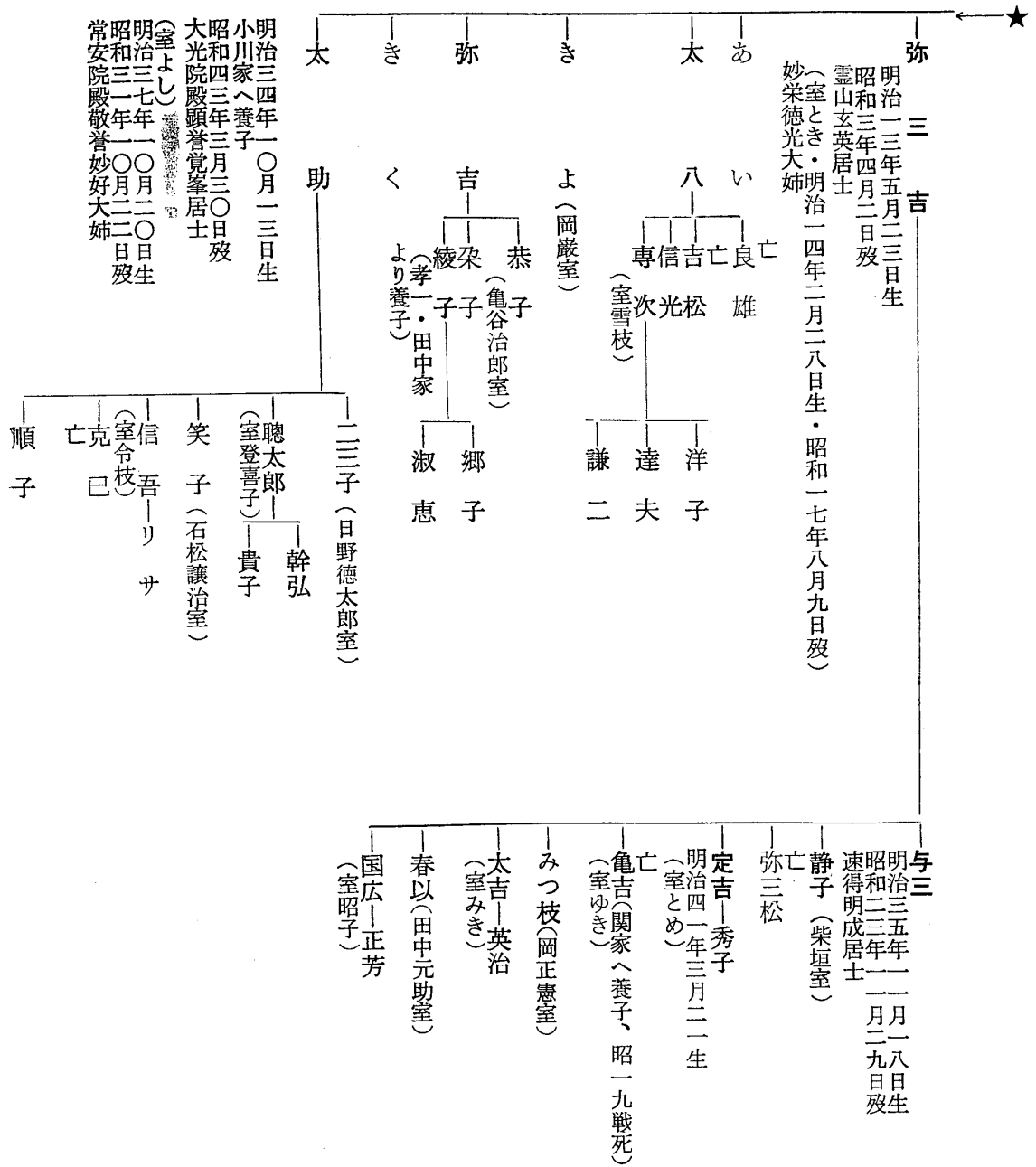
鉄二（進八巖の次男、鉄二のあとを嗣ぐ）

巖
正憲（室みつ枝）
進（室冬子）
弘（室米子）
靖憲
哲夫
みさを
貴司

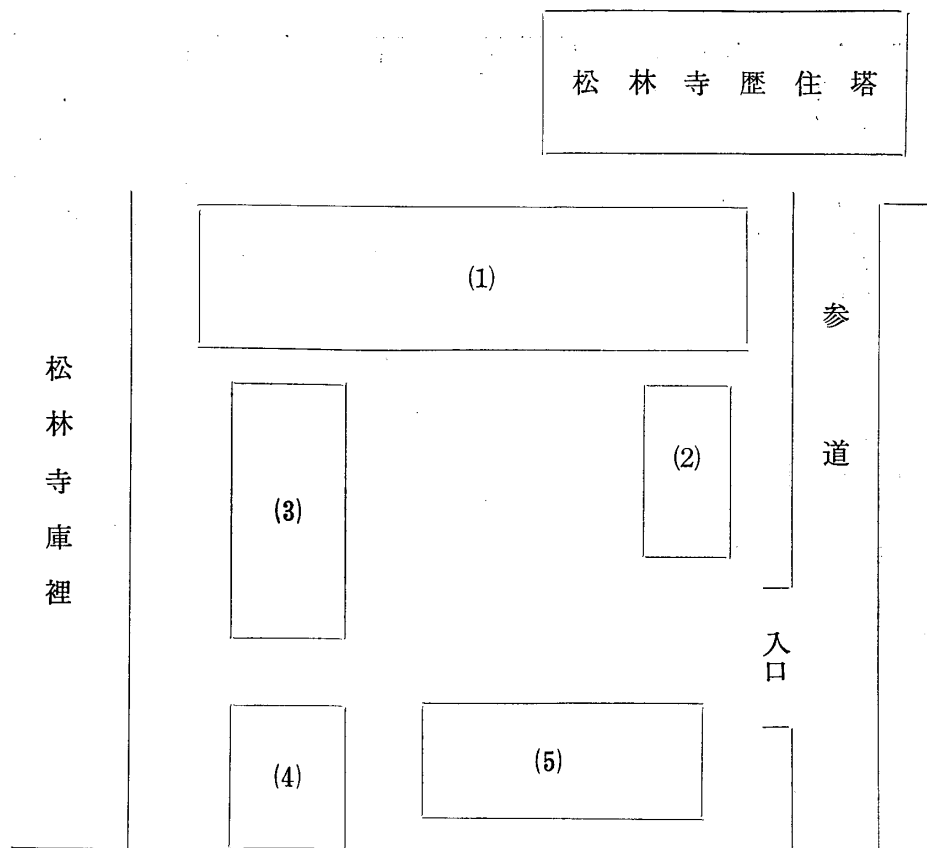
弥三
次
弥三
次
入膳村にて分家

弥三
次
太
吉
（室りさ・吉原村安右衛門三女・文政六年一月八日生・明治三年二月二九日歿）

安政元年一月八日生
大正五年二月二七日歿
運中玄勝居士
（室りよ・安政四年六月一日生・昭和十五年九月八日歿）
蓮葉妙臺大姉



(昭和四七年一月二〇日現在)



岡家墓地配置図

る。第二一頁の岡家墓地の写真と上の配置図を御参照ありたい。

(1)は中央正面で、ここに岡氏宗家の六基の墓石が並列し、右から第一基には、無相道因居士・桂月幽香信女(居士は明和六年二月一二日歿、信女は、元文元年六月二五日歿。『松林寺過去帳』)、昭和四七年八月の時点で、私が調査したところによれば、第二基は碑面が磨滅して判読することが不可能。第三基は当寺開基鑄叟全鉄上座・元禄三年六月二十二日、第四基は春窓貞運尼上座、元禄二年霜月二十九日、第五基は格源道致居士・南養自薫大姉、第六基は第二基とおなじ理由をもって判読不可能である。この六基は、昭和三八年(一九六四)一〇月、小川太助氏が祖先供養のため改修した時に、あるいは石工が元の位置を理由もなく左右したかも知れないが、このうち第二基と第六基とが孤雲休白居士・柏庭妙樹大姉の墓石であるというのが、昭和一〇年代に碑面を判読した野島氏の報告である。(2)「空 岡家先祖代々精霊位」と碑面に刻んである。昭和一三年(一九三八)一二月、東京市小川太助氏の建立になるもので、現当主は小川聡太郎氏。いま、(1)の墓地の供養ないし管理はすべて小川氏によってとりおこなわれている。(3)は岡氏分家の墓石群で、これは岡家の血縁者である朝日町神田町の氷見徳太郎氏が供養をつづけている。この墓地も近年、氷見氏によって改修された。氷見氏夫人が岡家ゆかりの人である。(4)(5)は、朝日町泊下町の岡清氏がその供養主となっている。

こうして、元禄二年(一六八九)の年記をもつ春窓貞運尼上座の墓をはじめとする約三百年まえからの墓石群がそのまま現存し、しかもその

子孫が繁栄をつづけて、いまでも先祖の供養を欠かさないでいるという事実は、日本古来の美風をもっともよく伝えており、まさに同慶の念に堪えないというべきであろう。

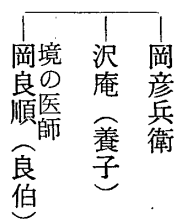
四、沢庵和尚と岡家

さて、沢庵和尚と岡家との関係については、三、四の異説がならびおこなわれている。

その第一は、『入善町誌』⁽³¹⁾に紹介されている二種の史料である。すなわち、泊の木下家の伝承と愛場家所蔵の入善の岡家の記録である。それは左記のとおりである。

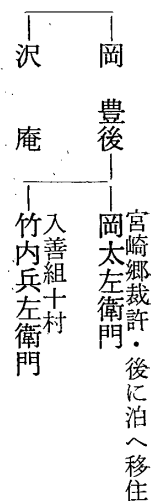
a 木下家（泊）伝承

松林寺開基・十村役



b 岡家（入善）記録（愛場家所蔵）

△竹隠△竹内家の口碑△



これによると、まず『木下家伝承』では、沢庵は松林寺開基・十村役の彦兵衛の弟であり、医師良順の兄となっており、三人兄弟である。そして括弧内に養子としてあるのが注意を引く。この彦兵衛は、孤雲休白居士を指すのであろうか。あるいは居士の子の二代彦之丞政保を指すのであろうか。もし、彦之丞政保を指すのであるならば、彦之丞は元禄三年（一六九〇）に七十二歳で死歿しているから、およそその生年は元和四、五年（一六一八、一六一九）頃となるが、沢庵は天正元年（一五七三）に生れ、正保二年（一六四五）に寂しているから、沢庵の方が彦之丞政保よりも年長となつて、従つて弟には相当しない道理である。また、沢庵の弟の位置にある良順（良伯）は、孤雲休白居士の二男すなわち彦之丞の弟の加藤次が別家した家系に属するひとであつて、少くとも政保や加藤次と同時代の人物でないことは、岡良伯や岡七右エ門がともに加藤次を「先祖」（『岡与三右衛門由緒』）としていることによつて明白である。従つて、この記録は、なにかの誤解がまぎれこんでいると言わざるをえない。

また、愛場家所蔵の『岡家記録』では、沢庵は、岡豊後の弟に配されている。しかし、管見によれば、岡備後という名はある（『岡与三右衛門由緒』）が、岡豊後というのは、この記録だけに限るのである。他に

は全く見えていない。そして、岡豊後について探索の手がかりは皆無である。そこで考えられるのは、おそらく豊後は備後の聞き誤り、書き誤り、伝え誤り、ではなからうかということである。かりに、岡備後の誤解であるとする、このひとは孤雲休白居士の父親ないし祖父のいずれかでなければならぬ。なんとすれば、この備後は、但馬国出石城の山名祐豊の家老であつて、天正八年（一五八〇）落城の際、ひそかに城を抜け出て北陸へ逃亡したひとであつた筈である。然し、いま沢庵が岡備後の弟となると、孤雲休白居士よりも十歳年少の沢庵であるからには、なんとにしても釈然としないものがある。孤雲休白居士は、正保四年（一六四七）に八二歳で歿しているから、その生年は永禄八年（一五六五）となつて、沢庵のおよそ十歳年長である。それゆえ、この愛場家文書にも、なにかの混乱がひそんでいると考えざるをえない。右のとおり、『木下家伝承』といい、愛場家の『岡家記録』といい、大幅な相違点はあるが、沢庵が岡彦兵衛ないし岡豊後の弟の位置に示されているという点では、明らかに一致しているわけである。

第二は、『松林寺開扉仏縁起』の説である。ここでは、沢庵は岡彦兵衛の舅にあてられている。即ち言う。「但馬国山名之城主山名民部少輔」の「家老岡彦兵衛」は「舅沢庵和尚」の「江戸表品川東海寺」に聖観音を「安置セムト思立」つたと。それで、問題は、舅の一字である。ここで舅とは何を意味するのであろうか。試みに、手許の諸橋轍次博士の『大漢和辞典』を被見すると、母の兄弟つまりおじ、夫が妻の父をよぶ称、妻の兄弟、などの意味がいま必要とされるであらう。然し、

一般に、舅というのは、夫が妻の父をよぶ称となるが、然し、出家無妻の沢庵が、岡彦兵衛の妻の父親である筈はないから、これは通らない。すると、母の兄弟即ちおじは、どうか。孤雲休白居士よりも十歳年少の沢庵が、居士の父親ないし祖父とも想定される位置にある岡彦兵衛のおじに当たるとは、常識的にはとても考えられないことである。そこで残されているのは、沢庵を岡彦兵衛の妻の兄弟にあててみる推量である。これは、年令などのことを考えあわせてみると、一概に無理な説とも言えないのであつて、さきの愛場家『岡家記録』にも共通するところがあると言えよう。

第三は、宗悦居士の「玉室和尚書簡解説」の説である。宗悦居士は、「沢庵ハ休伯ト桑梓を同くし、従兄弟たりしハ開扉仏観音大士縁起に記したりと覚ゆ、参看せられたし」として、沢庵は孤雲休白居士の従兄弟に当たるとのべている。然し、まえにも触れたように、『松林寺開扉仏縁起』には、沢庵は「岡彦兵衛」の「舅」とされるのであるから、宗悦居士はこの点において記憶の失があるのである。それで、宗悦居士の従兄弟説はまったく問題にならないのであるが、然し、宗悦居士の記憶の誤りはともかくとして、岡家の周辺では、すでに従兄弟説が伝承されている、その伝承を風聞した居士が、あやまって『松林寺開扉仏縁起』に典拠を示したのかも知れないのである。あえて憶測すれば、そのようにも思われぬではない。

第四は、沢庵は孤雲休白居士の肉弟であるとする説である。言いかえれば、孤雲休白居士は沢庵の実兄であるとする説である。ただ、この説

は、さきの三説のように成文化した文献記録としては伝わっていない。つまり、岡家ならびにその関係方面において口碑として伝わっているにすぎない。もっとも、『木下家伝承』や『岡家記録』が、それぞれ沢庵を岡豊後ないし岡彦兵衛の弟としているのは、このことの傍証と考えてよいであろう。

以上、沢庵と岡家との関係をめぐって、あいことなる四説を批判的に紹介してみたのであるが、このなかで、私は、第四説すなわち沢庵は孤雲休白居士の肉弟であり、孤雲休白居士は沢庵の実兄であるとする伝承にもっとも強い関心を抱くのである。以下、この点について、私の臆断をのべてみよう。

そもそも岡家は、松林寺過去帳によると、但馬屋の屋号をもっているが、これはもとより但馬出身をあらわすとおもわれる。野島二郎氏は、『岡の家名は但馬国養父郡岡村（大蔵村岡）の出身を表わしている。岡村は旧幕時代に交替寄合であった山名氏の知行所である』と論じている。永田豊州氏によると、大蔵は元出石領で、現在兵庫県朝来郡和田山町にあたり、和田山町に岡の地名があつて、そこに五〇戸ばかり人家が存するが、岡姓は無いとのことであるが、越中の岡家によれば、岡家の遠祖は、但馬国出石の山名家の家来で、天正八年の山名落城ののち、聖観音像を奉じて、北陸路へ逃げのびたのである。このことは諸資料のあいだに若干の相違点はあるにせよ、ほとんど一致して共通するところである。

松林寺墓地に在る岡家の塋城には、当寺開基の鑄叟全鉄上座と春窓貞

運尼上座によって、孤雲休白居士と柏庭妙樹大姉の墓石が建立供養されたのがその最初である。また、岡清家の『先祖代々過去帳』が、孤雲休白居士と柏庭妙樹大姉とを「本家元祖」と明記しているのは、岡家が泊邑に定着したのは、この二人のちであるのを裏づけるものであろう。

ここで考察の手がかりにしたいのは、この孤雲休白居士の戒名である。孤雲休白居士という戒名は、察するに、その生前、禅僧から与えられた居士号であろう。さきの玉室書簡のあて名が「休白老」とあることが、その一切を説明してくれる。休白は玉室よりおよそ八歳の年長である。然し、年長だから休白老というのではない。まさに、老は敬称である。今をときめく天下の老師芳春院の玉室宗珀が、老とたてまつって呼ぶ居士身の孤雲休白は、そう呼ばれるにふさわしいそれ相応の器量をそなえた大人物であつたことに間違いはなからう。単なるありがたや屋の信心家ではあるまい。そして、この休白老は、沢庵と特別の関係にむすばれている人であることが、玉室書簡によって動かしがたい事実を証している。

さて、ここで一転して、沢庵の行歴に目をそそいでみよう。従来一般に、沢庵は但馬国出石の秋庭能登守平綱典の子として生れたという。秋庭綱典の雲峰以閑居士という戒名は、岡政次の孤雲休白居士と近似する。雲峰以閑といい、孤雲休白といい、その用字、その意味するところは、すこぶるあい通ずるところがあるであろう。奇しき符合というべきである。

それはともかくとして、野島氏の報告によれば、秋庭家には、沢庵は

長男であるとの説が伝わっているようである。『万松祖録』にも、沢庵の弟半兵衛の名はあるが、沢庵の兄については具体的には何もしるされていない。永田豊州氏の書信にも、沢庵は長男であらうということがのべられている。然し、そうすると、ここに疑問が生ずるのは、わずか長男沢庵と次男半兵衛の二子のうちの長男沢庵を、七歳のとき、なぜに、父の綱典は出家への道を歩ませようとしたのであろうか。この点に触れた満足な文献史料はまったく皆無である。まったく皆無でなければならぬような、かくされた事情がひそんでいるということであらうか。

いまひとつ興味を引くのは、沢庵については長男説あり次男説ありとする出石町教育委員長名による公文書回答である。長男説あり次男説ありという説は、いったいどこから生じたのであろう。とくに次男説はどうして成立したのであろう。秋庭家には長男説しか伝承されていないようであるから、これは秋庭家以外の他家から流れ出た説でなければならぬ筈ではないか。もし、この仮定が許されるならば、私は、「沢庵は秋庭家から僧籍に入ったことは相違ないが秋庭綱典の実子であるか、養子であるか、沢庵の出家の理由の一として沢庵の秋庭家へ入籍後、綱典に実子半兵衛が生れたので嫡子の地位を譲ったのではないか」という野島氏の指摘は、きわめて重大な意味をふくんでいるとおもわれる。

沢庵は、岡家の子として、のちの孤雲休白居士の実弟として生れ、幼にして実子のない秋庭家に養子として迎えられた。ところが秋庭家には、ほどなく半兵衛という実子、沢庵にとっては弟が誕生した。そこで、卒直に言えば、沢庵は秋庭綱典の家督においてはなほだ微妙な立場

においこまれることとなった。このような事情から、沢庵七歳のとき、父に連れられて出家への道を他律的に選ぶこととなった。この意味において、沢庵は、実家からも養家からも捨てられた人である。家庭的な肉身の情に恵まれない、すこぶる薄幸な人である。これに加えて、天正八年、山名城落城に臨んで、城主は、七〇歳の老父を捨てて他郷に逃げたため、やがて山名家の滅亡と岡家の離散を招き、世間の無常、ひとの世の非情を、利発聡明な沢庵に痛感させたのであった。かくて、沢庵は、養家秋庭家の家庭事情、実家岡家の破綻、主家山名家の滅亡などの背景を背負って、子供心にもいさぎよく出家への道へ進んでいったのである。

一方、実兄の孤雲休白居士政次も、仏法帰依の念に厚く、参禅に精を尽していたとおもわれる。その子息夫妻、孫夫婦が、松林寺の開基として格別の援助を寄せていることによって明らかである。休白の子彦之丞政保夫妻は、つたえられる岡備後の聖観音の奉安と、両親である休白居士夫妻の霊位供養と、自身の魂の安らぎを求めて、有縁の覚海広円和尚に教えを請うたわけであらう。相談をうけた覚海は、加賀藩第二代前田利長の菩提寺、越中の高岡山瑞竜寺の第四世在田春竜和尚が隠居所の小庵を興隆すべく、春竜を勧請開山第一祖と仰ぎ、鑄叟全鉄上座と春窓貞運尼上座を開基として、松林寺の基礎を固めた。そもそも、能登、加賀、越前には、総持寺、大乘寺、永光寺、永平寺をはじめとする曹洞宗の名藍大寺が屹立し、藩祖利家が、曹洞宗、越前宝円寺の大透圭徐に師事して深く仏法を得るところがあった。利家の号、高德院殿桃雲浄見大居士は、大透の命名であり、利家の正室、芳春院は大徳寺山内に芳春院を建

立する一方、前後して能登総持寺山内に芳春院を建て、大透の法嗣象山徐藝^{うん}をむかえて開山とした。こうして、前田家は利家、利長、利常とつづいて、とりわけ曹洞宗に長いつながりと深い信心をもっていた。このことが、おのずから、彦之丞政保夫妻の曹洞宗への傾斜を強めていったとおもわれる。

さてまた、休白の孫すなわち俗に「泊彦兵衛三代」の通称をもつ与三右衛門政春は、加賀藩で一万石相当の十村代官を勤めた人物であるが、他郷から移住してきた岡家の一族が、どのような過程を経て、村落支配の重役に任じられたか、当然おこる疑問であろう。これについては、玉室や沢庵の存在そのものが決定的な力をもっていたのではないかとおもわれる。すでに明かしたとおり、玉室の住する芳春院は、加賀藩祖前田利家の正室芳春院が建立した寺院である。玉室は芳春院第一祖としてむかえられた。この玉室と文字どおり生死をともにした盟友沢庵の実兄にあたる孤雲休白居士岡政次を祖とする岡家については、加賀藩は全幅の信頼と尊敬を寄せていたのではないのか。そのような推測を与えて、岡家が十村役に就いた外的条件を説明するのは、決して無理ではないであろう。

おわりに

沢庵和尚をめぐる松林寺と岡家の関連について、伝えられる諸資料の紹介と整理、および若干の考察を試みた。はじめにのべた幾つかの自問に対する完全な自答が得られたかどうか、かえりみて忸怩たるものがある。今後さらに新資料を蒐集し、諸角度からの批判吟味を加え、より厳

密な分析と総合がなされるべきであろう。いまはそのための問題提起にとどめておく。

なお、この論文は、富山県下新川郡朝日町泊松林寺住職在田祐芳氏、京都府京都市北区紫野大徳寺町五五芳春院住職三重野宗璞氏、兵庫県出石郡出石町宗鏡寺住職永田豊州氏をはじめ、東京都在住の岡太吉氏、岡国広氏、小川聰太郎氏、富山県在住の野島二郎氏、河村浄芳尼、在田道弘氏、岡定吉氏、氷見徳太郎氏夫人、岡清氏そのほか関係各位の御協力を仰いで、とりまとめることができた。ここに御芳名をしるして、甚深の謝意を表し、永くここにとどめんとするものである。

註

(1) 或る委嘱というのは、過去数年間にわたって、松林寺参禅会の講師をつとめてきた鎌田博士が、健康上の都合で、私にその後事を依頼されたことである。

(2) 『北日本新聞』（富山・新川版）一九六四・五・一〇、その他

(3) 野島二郎「沢庵和尚の実家について」『日本歴史』第二一三号、吉川弘文館、一九六六、六八―六九頁。ここに参考までに全文を転載しておく。

沢庵和尚の実家について

野島 二郎

三代將軍家光に重用され江戸品川東海寺の開山となった沢庵和尚の実家については従来、但馬国の出石の秋庭家の出であるとされている。筆

者は越中国の極東に位置する朝日町泊の生れであり且現住しているが、幼少の頃から泊に但馬屋と称する由緒ある商家が明治初期まであったとか、明治初年に東海寺へ泊から国枝と云う老婆が参詣した節、同寺の執事が御開山は越中泊の出であると語ったとか聞いて不思議な話だと思ったりしていたが、戦後になって朝日町の文化財保護調査委員なり、朝日町から八キロ西方の入善の町史編さん委員を委嘱されたりして、偶々両町に居住する岡一族が沢庵の実家であると云う口碑を今に残している事実を知ったのである。朝日町に松林寺（住職在田祐芳氏）という曹洞宗のお寺が現にあり、寺宝として大徳寺百四十七世の宗伯から休伯（沢庵の実兄とされている人）に宛てた沢庵に関する書状を保管している。休伯（岡彦兵衛）の家から前田家（藩主）に移り戦後に岡休伯家（現在絶家）の旦那寺である松林寺に前田家から寄贈されたものである。同寺にある岡家に関する古文書や記録を総合すると、伯馬国の山名氏の戦国時代の家臣に岡備後と云う侍があり、その嫡子彦兵衛は出石落城の節討死し、その嫡子は泊での岡彦兵衛家の初代となった彦兵衛政次で休泊と号していたが、正保四年（一六四七）十一月十二日八十二才で老死したが沢庵はその弟で但馬国出石の秋庭家に養子となっていた。休伯の嫡子は彦之丞政保（元禄三年六月歿、松林寺開基、泊彦兵衛家二代）と云い、その嫡子は与三右エ門政春（宝永七年十一月歿、泊彦兵衛家三代）と云い加賀藩の十村代官を勤めた人であるが、十村役は職務の内容から見て大庄屋であり支配地の範囲から見て壱万石余りの小大名に相当し更に代官の役を併任した。他方、入善町の愛場家と云う村肝煎（庄屋・名主）を勤めた家に所蔵する記録に、岡家に戦国末には但馬国で赤松家の家臣

の岡豊後と云う侍があり、その弟に沢庵がおる旨記されている。松林寺の古文書・記録に比し愛場家の記録は良質ではない。岡の家名は但馬国養父郡岡村（大蔵村岡）の出身を表わしている。岡村は旧幕時代に交替寄合であった山名氏の知行所である。右の事情を得たので、定説である沢庵の実家の存する但馬国出石（出石郡出石町大谷）の秋庭家に、(1)沢庵は秋庭家から僧籍に入ったことは相違ないが秋庭綱典の実子であるか、(2)養子であるか、沢庵の出家の理由の一として沢庵の秋庭家へ入籍後、綱典に実子半兵衛が生れたので嫡子の地位を譲ったのでないかを照合したのであるが、当主忠司氏は、①沢庵は長男である②岡彦兵衛家について知りたいとの回答があり、入善町史編さん委員会から出石町教育委員会に照合した処、教育長名を以ての公文書に依ると、(1)沢庵については長男説あり次男説あり、(2)秋庭家には、古文書、記録はない、但し沢庵からの書状が一通所蔵されているとの返信に接した次第である。秋庭家は沢庵の僧籍に入る以前の実家であるか、生家であるか養家であるかについては速断できない様である。

- (4) 永田豊州「沢庵」『講座禅』第四卷、一九六七、筑摩書房。
- (5) 伊藤康安「沢庵」再版、雄山閣、一九四六。
- (6) 禅学会「沢庵禅師之研究」西義雄ほか編著、大東出版社、一九四四。
註の(4)を参照。
- (7)
- (8) 「万松語録」卷之四「沢庵和尚全集」卷二。
- (9) 「東海和尚紀年録」「沢庵和尚全集」卷六。
- (10) 「沢庵和尚全集」卷六の口絵写真。
- (11) 一九七二年九月二七日付、東隆眞あての永田豊州氏書簡。

(12)(13)(14)(15)も右書簡。

(16) 『墨跡』「註」(8)より転載。

(17) たとえば『沢菴和尚全集』巻六を参照。

(18) 『京の禅寺』6版、淡交新社、一九六七。

(19) 諸橋轍次『大漢和辞典』縮写版第一刷、第九巻、一九六七、大修館書店。

(20) 『沢菴和尚全集』巻六。なお以下、繁雑を避けるため、特別の必要をのぞいて、出典を明記することは省略する。

(21) 『芳春院振古録』によれば、

一、芳春院様春屋国師江法を御聞き遊され、其以後御菩提所を紫野之内に御建立なされ度き思召し春屋国師に御相談にて今ノ芳春院御建立の事
一、慶長十二丁末年御普請御催有之 慶長十四巳酉年五月御建立成就仕り
春屋国師弟子玉室和尚へ住持御付けられ候事

とあり、芳春院の『歴代要略記』によれば、慶長十二年二月十九日玉室和尚出世開堂齡三十六才大徳第百四十七世

同年秋ヨリ当院作事相始但大仙院北隣也同十三年冬当院作事大略成就、円鑑国師賀儀有之

同十四年夏ノ頃客殿庫裡作事全備

とある。右は、一九七二年九月二〇日付、東隆眞の質問に応じられた芳春院住職三重野宗璞氏の回章である。ちなみに、岩沢愿彦の『前田利家』再版(一九六九、吉川弘文館)では、慶長一二年、芳春院は大徳寺に芳春院を建て、慶長一三年、芳春院が成り、開山は玉室宗珀であると、慶長一四年、春屋宗園は芳春院寿像に賛す、と明記してある。

(22) 横関了胤『繪持寺誌』一九六五、大本山繪持寺。

(23) 古田紹欽「沢庵和尚の夢」『ロータリーの友』七月号、一九七二、ロータリーの友編集事務所。

(24) 春木一夫「沢庵和尚と宮本武蔵」『大法輪』六月号、一九六七、大法輪閣。

(25) 松林寺蔵。

(26) 小沢助左衛門氏は、松林寺の檀徒で、戦後、東京都目黒区駒場にあった前田家屋敷の一部を住居にあてていたこともあったらしいが、そのうち、泊出身の参議員議員・日本共産党細川嘉六氏の力添えで東京都社会福祉施設の老人ホーム浴風園に移り、昭和三二年一月二日死去した。歿年は詳かでない。戒名は施無畏院祖園宗悦居士というが、これは生前に篤く帰依していた渡辺玄宗禅師に授かったもので、みずからは宗悦居士となっていた。以上は、松林寺住職在田祐芳氏の談話および同寺過去帳による。

ちなみに渡辺玄宗禅師(一八六九〜一九六三)は、越中の大和・光嚴寺、加賀の古刹・大乗寺の住持を経て、曹洞宗大本山繪持寺独住第一七世の親座に昇り、近來における禅宗の高僧とあがれた稀有のひとつ。勅賜号を円鑑不昧禅師という。禅師は、私の師翁にあたり、そのゆえをもって、私は一九五三年、大本山繪持寺僧堂に安居、親しく禅師の巾瓶に侍した。

(27) 註(2)を参照。

(28) 堀江知彦『墨跡』 監修東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館、至文堂、一九六六。

(29) 境関所史編纂委員会『境関所史』一九六八年、富山県下新川郡朝日町役

場。

(30) 註の(22)を参照。

(31) 入善町誌編纂委員会『入善町誌』一九六七、富山県下新川郡入善町役場。